
ポケモンTHEクロニクル

月夜魅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンTHEクロニクル

【Nコード】

N5940Y

【作者名】

月夜魅

【あらすじ】

突如現れた異形の存在、悪魔……。悪魔から世界を守るため、デッドバスターとなったポケモン達が立ち向かう！！

序章前編：始マリノ刻

この世界には、二つの種族が存在する。

一つは、ポケットモンスター。彼等は、自らを魔獣と称したりする。地下都市アンダーワールドで暮らし、もうひとつの種族から身を守っている。

その種族が、悪魔と呼ばれる異形の存在。ポケモンを喰い、無限に成長し続ける魔物だ。

マザーコアと呼ばれる母体がいるらしいが、何処にいるかわからない。

この物語は、デッドバスターと呼ばれるポケモン達の記録。クロニクル

セイコク

成國 二〇二七年

地下都市、アンダーワールド。悪魔から身を隠して暮らす、ありとあらゆるポケモン達が住む世界。

東西南北の地区があり、ポケモン達はパレットと呼ばれる家で生活をしている。破れた衣と棒で作ったテント、石を積み上げて作ったモノ……。種類は様々。

全部で四つの地区は、四のブースに区切られている。かつて、外界にあった国と同じ数十七になるように。統治者である王の元、平和が保たれている。そんなアンダーワールドには、秘密組織と言っべき存在が……。

西地区 第四ブース

「……………」

右腕に包帯を巻いた漆黒のポケモン……ダークライ。彼はここの王で、闇の国という場所を納めていた。誰よりも純粹で優しい心を持ち、各国からも指示を得ている存在。

高台にいる彼が見つめる先には、十七人のポケモン。地面に座り、頭に機械ヘルメットを付けて眠っている。

彼等はデッドバスターと呼ばれている、特別な存在。悪魔の血を取り込み、悪魔ポケモンと化した……悲劇の戦士。世界を悪魔から守る為、自らこの道を選んだ者達だ。

「イメージトレーニング終了！！全員ヘルメットを外せ！！」

ダークライの号令で、戦士達は一斉に目覚める。

「次は武器のメンテナンスだな……。呼び出された順番に、ラルク博士の研究所へ。」

「「はい!!」」

デッドバスターについて、少しお話ししましょう。

デッドバスターになるには、悪魔の血を受け入れる……つまりは、適合者でなければならない。ただ思いが強いだけでは駄目なのだ。悪魔化すると、ポケモンの力と悪魔の力が合わさり更に強力な技を身につけることができる。そんなポケモン達が、デッドバスターとして活躍するのだ。

デッドバスターになると、体内に寄生兵器を宿すことになる。予め武器のオーダーを取るから、戦士達は安心して体を預けられる。その相手が……。

「いらつしゃゝあい　三ヶ月に一回のメンテナンスよゝん」

「相変わらず……ですね。ラルク博士。」

ランクルスのラルク博士。会話をしている戦士は、ゾロアーク。悪魔化している為、本来赤い部分が黒銀に染まっていた。鬣は、磨いた鉄のように美しく輝いている。

「ささ！座って座って」

「はい。」

「えっと……。カルマくんだね？武器はクリスタルの鎌。」

パソコンを片手に、ラルク博士はカルマと面談。武器の調子や、悪魔と戦っている最中に不具合がなかったか、破損はしたか等々。メンテナンスに必要な情報を集めていく。

「あ、お兄さん元気？弟くんは？三人兄弟なんだよねえ」

「博士、脱線してる場合ですか？」

「おっと！ついつい……。さて、とくに異常は無いみたいだから……バックアップだけにしようか。君はいつも無茶をするらしいからね。誰かさんみたいに。」

付き添いで来ているダークライをチラ見し、ラルク博士は準備にかかる。当のダークライはというと、苦笑いするしかなかった。

「みんなが終わり次第、貴方もメンテナンスね？ガイア黒王^{こくおう}。」

「わかっている。」

机にパソコンを置き、ラルク博士は後ろのメインコンピュータに向かう。ガチャガチャと何かを探し始めた。

「あつた。」

「……痛いんだよな。それ。」

「ガマンガマン！」

コンセント……に似た頭が付いてるコードを引っ張って来て、カルマの腕に突き刺した。その瞬間、カルマの体に激痛が走る。ほんの一瞬の出来事は過ぎ去り、息を切らしぐつたりと椅子にもたれる。

「い……てえ……。」

「あーやつぱり。ちょっとガタが来てるねえ。治しとくよ。」

「え、あ……はい。」

「痛いからって駄目だよ？嘘ついちゃ！」

「すみません。……イダッ！！いデデデデデッ！！」

胸を押さえてジタバタもかくカルマ。ダークライのガイアは、見て呆れていた。
本来ならこうはならないが、扱いが雑だとカルマのようになる。死にはしない。

「他の子は痛がらないんだよ？無茶苦茶な使い方、してるんじゃないの？」

「博士、それルークにも言っちゃって下さ……イッタァ！！」

「やれやれ。……はいおしまい！次はオズくんだね。」

「余はもう来ているのだ。」

一同振り向き、入り口の前に立つ声の主を見つめる。そのポケモンはデスカーン。デスカーンはカルマを見て、笑みを浮かべた。

「やあカルマ。ずいぶんと叫んでいたが、大丈夫か？」

「な……なんとかな。今、一人称とか喋り方…違ってなかったか？」

「ん？聞き間違いじゃないかな……。俺はいつも通りだぞ。」

「そうか……。じゃあ博士、また。」

「お大事に」

プラグは抜かれ、カルマは研究所を後にする。

カルマが去ったのをいいことに、デスカーンのオズは口調を戻した。

ふう……。と一息つき、オズは二人と会話する。

「さて……。前から話しかかった回想だがな。唯一の王適合者は、余とガイア殿だ。不適合者になってしまった王や民は……。」

「技も特性も失ってしまった。だよね？」

ラルク博士の発言に、オズとガイアは頷く。

不適合者とは、悪魔化せず、技も特性も失ってしまった者達のこと。悪魔の持つ治癒力はあるため、武器を手外界で悪魔を研究している。スラムという集落で、自給自足の集団生活。集落にはリーダーが二人いて、階級が上のリーダーが全ての指揮を取る。もう一人のリーダーは、補助をする為にいるようなものだ。ここからデッドバスターの基地に向けて、悪魔の出現や研究結果が届けられるのだ。

「今まではやたらめったにしていたから……。望んで来てくれた者達には、詫びねばならない。」

「今はディアルガとレシラムが協力してくれている……。不適合者を出さずに此处まで来たのは、余は、彼等のおかげだと思っている。」

「嗚呼。そうだな。にしてもお前、民に化けて活動をするとは考えたな……。私には真似できないぞ？」

「民のダークライはいないからな。デスカーンには民の者もある……。王だと隠すには打ってつけじゃ。」

強く鉄の扉を叩く音がし、一同は扉へ目を向ける。オズは慌てて椅子へ腰掛けた。というか……。立っている。扉を開けて現れたのは、ガイアの部下であるヨノワールだった。

「どうした？またアイツ等か？」

「は……。はいッ！！ズルズキン四人組が、脱走しましたッ！！」

エディミイという町を走る、ズルズキンの四人。悪魔化しているのは、内三人だけ。メンバーを紹介しよう。

先頭にいる、黒いタンクトップにズボンの皮、悪魔の目をしたズルズキン。『ルーク』。最近は黒い手袋を履いている。

後ろで彼の尻尾を持って走ってるのは、不適合者なのにデッドバスターをしている双子の弟。『エール』。白いパーカーがトレードマークだ。

傷付き失明した開かずの左目、胸にザラ紙を巻いた普通の色違い。

『シスカ』。

完全に悪魔化しているズルズキン。『イヴィル』。

その姿だが……ズルズキンの原型をとどめていない。鶏冠じゃなくて赤い鬚、肌は濃紺。五本指を折らないと地面に付いてしまう、長い腕。首と手首には白くふさふさの毛……。悪魔だから皮は着ていない。

以上。ズルズキン男子四人組の紹介でした。

「メンテナンスなんてしゃらくせえッ！！野郎共ーッ！！脱走だ走れー！！」

感情のままに進むルークを見て、はいはいとシスカは笑う。

「エール疲れた。ルークうー。」

「よしきたッ!!」

立ち止まり、ルークはお姫様抱っこでエールを運ぶ。

「チョツと待テ。ドコまで走ル気だ？」

奇怪な声でイヴィルが喋る。彼の言葉は、今いる三人にしか理解できない。理由は、またいずれ。

「とりあえず逃げる!!」

「……ヤレヤレ。」

「行くよ、イヴィル。」

走り去るルークを追うシスカとイヴィル。その頃ガイアは、高台からエディミイの町を見つめていた。

右手を町へ向け、目を瞑る。闇を見つめるガイアの目には、無数の白い光が映っていた。ガイアが見ているのは、ポケモン達の魂。これは、彼にしかない特集能力。手をかざしている範囲内の魂を見ることができ、悪魔とポケモンの識別も可能だ。なぜなら、悪魔の場合魂は赤いからだ。

「いたいた……。サクラ、頼む。エディミイ大橋の入り口付近だ。」

「はい。黒王様。」

女性のサーナイトは指示通りに超能力を使う。四人組を此方へ引っ張り込むのだ。十分もしないで、四人組は元の場所へ。ルークは胡座をかいてふてくされている。

「畜生。面倒臭せえ……。」

「黙れルーク。まったく……これで何度目だ？」

「グルルル……。」

「三十五回目だって。」

シスカが代弁。ガイアは呆れ果て、ため息すら出せなかった。

「あとはお前等だけにした……。ルーク、行ってこい!!」

「あいあい……。……。ん？」

ルークの皮を引っ張り、エールは表情で寂しいと訴えた。シスカが近寄り、一緒に待っててあげようか。と微笑む。

「グルルル……。」

「……。わかった。エール待つ。」

惜しむように手放し、ルークを見送るエール。ルークの姿が消えると、赤ん坊のようにグズり出す。大きな腕でエールを包み込み、

イヴイルは懸命に慰めた。

ルークが毎回脱走するのは、実はエールのため。エールは人見知り
が激しく、かつ臆病で寂しがり。ルークがいないと、不安に押し潰
されそうになるのだ。

「ルーク……。ルークう……。」

「大丈夫。シスカと自分ガイルカラ。一人じゃナイヨ？」

研究所の中、ルークは双子の弟のことをずっと考えていた。ラルク
博士の面談には正直に答えている。

「うわー、直すの大変だなあ……。相変わらず、エールくんの為に
無茶苦茶やってるね。なんで、不適合者のエールくんをデッドバス
ターにしるなんて言ったの？」

「色々あんだよ。アイツは、俺がいなきゃいけないんだ。離ればな
れだったら……。エールは……。」

「……。よし、直すよ？今回はかなりの激痛になるから、覚悟して
ね。」

コンセントに似たプラグと、注射針が付いたコードを取り出して
ルークの腕に。それが終わると、ラルク博士はコンピュータに向か
う。修正プログラムを起動させた。

「二時間はかかるからね？」

「了解……。……。うッ！！アアアアアッ！！」

ゾロアークのカルマが受けたものより強い痛み。必死に耐えるル
ークだが、我慢できず悲鳴を上げていた。
この様子を見つめながら、ガイア黒王は過去の回想をしていた。そ
れは、まだデッドバスターが生まれる前の……。ディアルガとレシ
ラムに出会うまでの記憶。

T o b e N e x t

序章前編：始マリノ刻（後書き）

【次回予告】

ガイア黒王

「真実の神レシラム、時の神ディアルガ。
彼等が無事、下界に来ていなかったら……我々は終わっていた。

次回は、今の状況になった理由を話そう。」

序章後編：全ての原点

回想

千年以上も昔、悪魔は突然現れた。強いポケモンを本能的に探し当て、片っ端から食い荒らす。惨劇は止むこと無く、悪魔を恐れたポケモン達は、地下都市を築き上げ地底で暮らし始める。以来、外へ出たことが無かった。デッドバスターが生まれるまでは。

数年前

地下都市で暮らし始め、千年が経つ……。悪魔に怯える暮らしが続いているポケモン達……。恐怖からのストレスに耐えきれずバタバタと死んでいった。これを聞き、世界各国の代表ポケモンが中央広場に集い始める。緊急集会が行われた。

南地区代表：リザードン

北地区代表：エンペルト

西地区代表：ドレディア

東地区代表二名：ドサイドンとケンホロウ（ ）

悪魔と戦った経験者：ダークライとミュウツー

部下に見守られながら、代表達は悩み苦しんだ。どうすればいい…と。

「セルフイオ王、ミュウツールの貴方が勝てなかったと父上から聞いています。誠でしょうか？」

リザードンが、ミュウツールに恐る恐る聞いてみる。ミュウツールは目を瞑り、静かに頷いた。

「申し訳ない……。ダークライと手を組んでも尚、勝気は無かった。あれから千年か……。このままでは、悪魔は地下都市にくるであろうな。」

これを聞き、部下達が騒然とする。ドレディアは二人に向けて叫ぶ。

「二大勢力と恐れられた、最強の闇と言われしお二人が勝てなかったのですか?!」

今度はダークライが言う。

「嗚呼。この通り痛手を負ってきたよ。」

ダークライの右腕には包帯。肘まで続く包帯を外すと、木製の義手が姿を現した。銀のネジで固定されていて、痛々しく見える。

身を震わせ、ドサイドンは「無理だ」と呟く。この言葉に怒り、リザードンが拳を作ってドサイドンに殴りかかるうとする。

「デメエーッ!!」

「待て、ガジェット。」

「!.....イブキ。」

リザードンを止めたエンペルトは、冷静にこつ切り出す。

「神に頼る他ないな……。」

また、辺りが騒然とする。存在がわからないモノにすぎる気か？
！と、ドサイドンは怒鳴った。

「いるだろう？」

「神話になッ！！実在しない存在に追いつかるより、我々でなんとかするのが正しいはずだッ！！それともイブキ……。貴様、神を見たことがあるのか？」

全ての視線がエンペルトに向けられる。表情一つ変えず、「夢に見た」と一言。ドサイドンは何も言わなかった。

この世界で、世界創造の神として語り継がれているポケモンは、二十以上存在する。一口に神といっても、民と共に世界を守る……いわば管理人のようなものがほとんど。彼等は【神の代行】と呼ばれている。

実在がはっきりと確認されていない特別な存在……。それが、彼等がいう【神】だ。エンペルトは、その中の一人に出会ったという。

「神話では確か、強き思いを抱く者にのみ姿を現すとあったな。夢

と言う形ではな……。信じられんな。」

「フン……。これだからドサイドンは嫌いだ。頭が堅い。」

「なんだと?!」

「喧しいぞ。」

ダークライに止められ、ドサイドンは静かになった。足元を見て、不服な表情をしている。

「今は作戦会議中だ。喧嘩や関係の無い会話は控えるんだ。……で？イブキ、その神は？」

「時を司りし者……ディアルガ。」

「……。それはまた、大層なお相手だな。話しを戻すぞ？議題は、悪魔討伐の作戦。エンペルト、イブキの提案はディアルガに頼むと……。だが、どうやってだ？」

「騙されたと思って、時の帳に行くというのは?」

エンペルト、イブキはそう提案するが……。場所がわからない。皆はまた悩み苦しむ。そんな中、何処からか声が。

「これを使うのはどうかな?」

「?!!」

「何奴ツ!!」

「そう警戒するな、ミュウツウの王。余だ。デスカーンのオズだよ。」

時計台へ視線が集まる。楽しげな表情で、デスカーンが鉄のタルを持ってこちらを見つめている。彼の頭の上に、ランクルスというポケモンがしがみついていた。

「降りて来たらどうだ?」

ダークライが言う。ゆっくりとこちらに向かって降りるデスカーン、オズ。

場所を開けてやり、一同デスカーンの言い分を聞いてみることに。

「よいしょ。」

ゴトン

「久しいな。諸君。」

「挨拶はいい……。オズ、それはなんなんだ？」

半場呆れているダークライ。腕を組んでタルを見つめる。真剣な表情に変わり、オズはためらい無く回答。中には、悪魔の血液が入っていると告げた。ダークライとミュウツーを除いて、一同は大パニック。

「そッ！！そそそんな物騒なモン何に使ったよ?!」

「そうよ!!」

「詳しく聞かせてもらおうか？」

リザードンとドレディアの話を押し退け、ミュウツーは言う。
ニヤリと笑うその笑みは、悪役のよう。

「おお恐い。……さて。余が言いたいのは、彼が説明してくれるぞ。
ランクルスのラルク博士だ。」

オズの頭から降り、タルの上に立つランクルス。場違いの明るい
雰囲気の際は、王達の前に関わらずぼため口。緊張もせずスラス
ラ会話をしていく。

「オズ陛下に悪魔の研究を頼まれましたね？殿下と外界に出て、コ
チラを採取したのさ 悪魔はポケモンを食べて成長する生き物で、
その強さは無限に上がり続ける。つまり、化物ってことだね。悪魔
にもタイプがあつて、攻撃、防御、スピードの三つがある。ポケモ
ンみたいに複数持っていたりするのは無いけど、こっちに帰るの苦労

したよ？そんな化物に対抗するには……？逆に我々ポケモンも、悪魔の力を付けるしかない！！ということで、策を考えました。」

「目には目を、歯には歯を……。というだろう？余はもう試した。セルフィオ帝王、最大でバリアを張ってくれないか？余が成果を発表しよう。」

「何？最強のこの私を、越えているとでも？まあいいだろう……。」

嘲笑い、ミュウツーは言われた通りにした。王や部下達は後ろを避け、彼等の左右に着いた。

深呼吸し、オズは集中力を高める。構えて、影の手全てをミュウツーに向ける。余裕の表情をするミュウツーだが、オズは勝てると確信していた。

赤黒い炎を手に纏い、手を全て中央へ。ポケモン技では無い、炎の光線を発射した。

刹那、ミュウツーの顔色が変わった。背筋に冷たいモノが走り、完璧な防御姿勢を取ろうとするが。もう遅い。

ドオオオオン！！

「「ヴィヴァーチェ王ッ!!」」

ミュウツーの部下達が走る。煙が晴れると、壁に叩きつけられ瀕死寸前のミュウツーが……。

「ぐ……うう……。」

「この通り、パワーは悪魔そのものだ。」

「なるほど……な。フッフ……。良い成果だ。オズ。」

「ズタボロの貴方を見るとは思わなかったのだ。」

ニヤニヤ笑いながら、オズはオレンの実を投げ渡した。

収穫はそれだけでは無い。オズは一同に向けて言う。「今度はなんだ？」とダークライ。腕を組んで気だるそうな目をしている。

「時の帳が光っていた。」

「「ええ?!」」

「お前見つけたのか?!」

「かっかっかっか!地上に残されてしまったポケモン達が、悪魔に食われる様を天界からしっかりと見ていたみたいだぞ?神々は、やっ
と味方に着いたのだよ。……千年待った。千年もツ!!余の叔父上
が言っていた奇跡が、今ツ!!起きたのだ!!」

「んゝんゝ。興奮してるところ悪いが、悪魔化するにはどうすれば
いいんだ?」

咳払いの後で、ダークライはオズに聞いた。

「簡単だ。悪魔の血液を飲めばいい。ただしな、身体に馴染むまで
かかるぞ?余は一ヶ月くらいだったかな?」

「無事に時の帳に辿り着くには、悪魔化するしか!!」

「だな!!」

「では、開けますね。」

ラルク博士は、バルブをひねってタルの蓋を開ける。蓋はゆつくりと持ち上げられ、中から大量の鮮血が現れた。石のコップに鮮血を汲み、オズは王達に手渡す。意見一致したものの、王達は抵抗の表情を浮かべている。その中で二人、ためらわず飲み干したポケモンが……。

「ガイア黒王、セルフィオ帝王……。決意が早いお二人じゃな。」

「フン……。このセルフィオが遅れを取るものか。悪魔からポケモン達を守る……。王として当然のことよ。」

この言葉を聞き、王達は次々と鮮血を飲み干していく。噎せかえる他の王達をよそに、ガイアはセルフィオを横目で見つめ言った。

「元・恐怖政治をした独裁者が、何を言っかと思えばそれか。」

「なんだと？」

「言っ たままの……………うッ！！」

胸を押さえ、ガイアは崩れ落ちた。ミュウツー、セルフィオに抱えられたガイアの体は、四十度を超える熱を出していた。熱と激痛に耐えるどころか、ガイアは気を失ってしまった。呼吸はしている。

「ガイア……………！！ガイアッ！！」

「セルフィオ帝王、大丈夫。しかし何故だ？ガイア殿だけが余と同じ症状を……………。博士、調べてくれんかな？」

ガイアはオズの宮殿に運ばれ、完全に悪魔化するまでオズに見守られた。その間王達は、ラルク博士の研究所で血液検査を受けることに。すると、不適合だったと告げられる。

「なんだと？！」

「セルフィオ帝王、そう怒鳴らないでくださいな！えっとねえ……………。

どうやら、全員が必ず悪魔化する訳じゃないみたいです。お気を悪くさせるようですが、技と特性が全て無くなっていました。」

頼みの悪魔化は出来ず、王達は落胆。二人だけに任せるしかないのかと、ケンホロウは嘆く。

「私は諦めんぞ……!!」

セルフィオは研究所を去ろうと扉へ向かう。ラルク博士に止められ、立ち止まった。

「セルフィオ帝王！いくらミュウツールの化学力でも、こればかりは無理ですよ……」

「ガイアは私に教えてくれたのだ……。本当の幸せを、本当の生き方をッ！！あいつだけに良い格好はさせないッ……」

言って、セルフィオはいなくなった。

「やれやれ。仲が良いのか悪いのか……。」

ケンホロウは苦笑いで扉を見つめる。

「ライバルってやつですわね？……あの、これを利用すれば、悪魔を倒す戦士を作れるのではないでしょうが。」

ドレディアの提案。それは良い判断だと、ケンホロウは賛成。

「各地に、悪魔を倒そうと意気込んでいる集団がいるんだ！！彼等に頼めば、私達の代わりに戦ってくれるはずだッ！！」

「けど、適合者が出るのは奇跡でしかないぞ？オズ陛下とガイア黒王はたまたま当たっただけさ。」

ラルク博士は乗り気じゃない様子。王達を止めはしなかったが、結果はこの通り。

千、二千……。男女問わず、王の呼びかけで自ら現れたのはこれだけ。本当ならもっといるはずなのだが……。

「……どうだ？イブキ、ガジェット。」

「……いたッ！！が……少なすぎる。」

これだけ集まってたった四人しか適合者が出なかった。しかも子ども。

混乱するポケモン達を宥めようと、必死に呼びかける。しかし、野次や罵声が治まることはない。そんな時……あの声が。

咎めてはいけません。

静まりかえるポケモン達。天井を見上げ、無意識に声の主を探している。

彼等は、私に従って動いただけ……。今苦しんでいる子ども達は、神に選ばれし勇者。今は、試練を受けているところ……。

「貴方は誰だ！！名を聞かせて下さいッ！！」

エンペルトが、声の主に向けて叫ぶ。優しい温もりを持つその声は、ポケモン達に衝撃を与える。

私は、白き混沌……。真実の大いなる龍、レシラム。

「レシラム……！！」

二人の王と、その子達を時の帳へ向かわせるのです。私は、そこでディアルガと待っています。

声が消え、子ども達は親に決意を伝えていた。

「ボク、神に選ばれたんだね。パパやママを守るから、心配しないでね。」

「父ちゃん、俺、もう甘ったれたりしないから……!! だから、だから……!!」

「わかった! もう何も言っな……!! 頑張れ!!」

空気の変わりように、不適合者だった王達は啞然としている。神の登場で、こんなにも変わるものなのだろうか。いや、神だからこそその効果なのか……。

「待たせたな。」

「……セルフィオ帝王。やっぱり駄目でしたのね。」

赤い目、黄色く鋭い瞳。悪魔の目をしたミュウツー、セルフィオ帝王が姿を現した。無理矢理悪魔化することに成功したように見えるが、失敗したのだ。残念そうなオーラを纏っている。何故か首に赤いスカーフを巻いていた。

「目が変わっただけで、何も変わっちゃいない。ただな、良いモノを開発した。」

「良いモノ？」

「嗚呼。試作品はガイアに使ってもらう予定だ。無論、私も使うぞ？」

笑い、スカーフをめくりあるモノを見せる。ひし形の、黄緑色した石だった。実はこれ、後の寄生兵器になる原型。ラルク博士とセルフィオ帝王が協力し、改良に改良を重ねて寄生兵器が誕生した。

一ヶ月後

ダークライ、ガイア黒王の右腕に変化があった。五本指の、悪魔の腕になっていたのだ。皮膚は濃紺で、赤く鋭い爪が恐怖を呼び覚ます。最初に紹介したズルズキン、イヴィルとは違って長さは変わってない様子。

「これは……！！！」

「悪魔化、できたぞ。」

中央広場には、あの王達と適合者の子ども達。そして、ガイア黒王とオズ陛下の姿がある。いよいよ、悪魔のいる外界へ行くのだ。

「時の帳があるのは、かつて火の国があつたアルランダ地方だ……。セルフィオ、サポーターは任せたからな?!」

「最小限の超能力しか使えなくなったが、力になろうぞ。っと、その前にガイア……。これを。」

「ん?」

あのひし形の石を投げ渡し、セルフィオ帝王は何処かに埋め込むように指示。

「試作品の兵器だ。使ってくれ。」

「実験は？」

「私もするから安心しろ。ほら。」

「……そういうことか。」

悪魔の手の甲を切り裂き、傷口に石を無理矢理押し込むガイア。激痛が襲いかかったのは、言うまでもない。血に染まった右手の傷口は直ぐ塞がり、石と皮膚が一体化した。

「ハア……。ハア……。」

「スゲー。」

黒銀のゾロアが小声で言った。立ち上がり、ガイアは全員に向けてこう言った。まだ苦しそうに息を荒げている。

「此処までトントン拍子に進んで来たが、もうこんな奇跡は無いぞ？！ここから先は、何が起きるか予測不可能だッ！！今日より我々

は、悪魔から世界を守る使徒……デッドバスターとして生きることになる！！後戻りは出来ない！！進むのだッ！！」

「オオーッ！！」

「我に続けッ！！選ばれし勇者達よッ！！」

現在

そして、無事に時の帳に辿り着き……。ディアルガとレシラムに出会う。

彼等の住む天界も、悪魔に侵略を受けたらしい。創造者にして母である、アルセウス。そして、兄弟である他の神々がマザーコアに連れ去られてしまった。逃げ延びたディアルガとレシラムは、長い年月をかけて下界へ降り、彼等を導いたのだ。

いくら万能の神でも、悪魔には敵わなかった。そんな相手に、我々デッドバスターは戦いを挑んでいるのだな。

メンテナンスが終わり、ぐったりしているルークを見つめながら、
ガイアは心中で呟く。

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン

……

「エールだな。」

苦笑いし、ガイアは扉を開ける。オレンジの十字架が模された白い盾を持ち、エールは盾で扉を叩いていた。暴走しないようにと、
イヴイルがエールのパーカーを掴んでいる。

「ルークは?!」

「大丈夫。いるよ。今プラグを外すから、待っててくれ。」

ガイアの言葉を聞き、エールは笑顔になる。

ヨタついて立ち上がるルーク。急いでエールの元へ向かい、抱きし

めた。イヴイルは、パーカーから手を離す。

「心配かけたな。エール。」

「ルーク！」

頼ずりするエールを見つめ、ガイアはまた過去を思い出す。

回想

「よくぞ、此处まで来てくれた。」

「待ってましたよ。皆さん。」

巨大な蒼龍ソウリウと白龍ハクリウ。ディアルガとレシラムだ。

「エンペルトから聞いたのである。あの時はフォローしてくれて助かったのだ。余が代わりにお礼を言うのである。」

「いえいえ。実は、我々も悪魔の襲撃を受けて……。何とか逃げ延びて来たところなの。」

「「ええ?!」」

「悪魔の血を使った技術は、もう会得しているな?私とレシラムの力で、血に適合したポケモンを探し出す手伝いがしたい。あと、小さな力だが加護を……。加護を受ければ、ある程度力がますはずだ。」

「悪魔が下界にいるせいで、我々にとって有毒な瘴気が世界に充満している。余り外へは出られないから、これくらいしか協力できない。」

「ディアルガが言うには、悪魔の血を飲んでいれば適合者でも不適合者でも外界で活動可能らしい。普通のポケモンだと、瘴気にやられてすぐ疲れてしまうようだ。そして、神にとっては有毒ガス。」

「連れ去られてしまった、ゼクロムお兄様やパルキア兄様が心配だ」

わ。お母様も、無事かどうか……。死んでしまっていたら、どうすれば……。!!」

レシラムはうつ向き、涙を流す。ニカツと笑ったオズは、レシラムに言う。

「余と仲間達で、必ずアルセウス様達を助け出すのだ!だから、泣かないで欲しいのだ。」

「ありがとうございます。私達も、できるだけ協力しますわ。さあ、今日はお開きにしましょう。そろそろ日が沈みます。悪魔が活発に動く前に!」

頷き、神々を背に走り去る。そんな時……。

「ストップ!」

ガイアは一同を止めた。茂みに何かいると言い、掻き分けて行く。すると奥から、衰弱しているズルズキンが四人現れた。不思議なこ

とに、内一人は悪魔化している。三人を守るように腕を伸ばしていた。

「……まだ、外界で生き延びている奴等がいたのか。」

……そう。この四人こそが、ズルズキン四人組。ルーク、エール、シスカ、イヴイルなのだ。
次回、ついに物語が始まる！！

T o b e N e x t

序章後編：全ての原点（後書き）

【次回予告】

レシラム

「デッドバスター、ズルズキン四人組はいつも一緒。けれど、何故かシス力だけが任務に呼ばれてバラバラに……。」

さあ、物語始まったの最初の任務です。

次回も

希望の光がありますように。」

一章：四人組と悪魔

いつも一緒のズルズキン四人組。ルーク、エール、シスカ、イヴイル。ルークとエールは双子の兄弟だけど、シスカとイヴイルは義兄弟。どうやって出会い、どうやって仲間になったのか……。彼等の日常を見ていきましょう。

「ZZZ・・・。」

「朝ー！起きろー！」

団子状態で眠る四人組。エールはルークの腕枕で寝ていた。手加減無しでルークの背中をビシバシ叩くエール。ルークは一気に現実へ引き戻された。

「ん？朝か……。」

「おはよー。」

起き上がり、ルークは残り二人を叩き起こす。猫みたいな背伸び

をするイヴイル。立ち上がり、木箱の上の携帯電話（通信機）を見つめる。ライトが赤く点滅していた。

「黒王様かラのだ。」

「昨日は昨日、今日は今日で、一体何なんだよ？」

面倒臭そうに通信機を受け取り、ルークはメッセージ機能を動かし内容を確認。三人がメッセージを聞いている傍らで、エールはルークの尻尾を抱いていた。

『おはよう。デッドバスター諸君。前回から話していた、デッドバスターの候補生から戦士が生まれた。みんなに紹介したい。並びに、上級悪魔出現の際に備え緊急訓練を執り行っ！全員、基地に集まってくれ。以上だ。』

これを聞き、「おっせえんだよッ！！」とルークが怒鳴る。通信機を地面へ投げつけるふりをして、静かに懐へ入れた。

「飯歩きながら食うぞ？なんか木の实持ってけ。」

「はい。」

ということで、四人組は橋を渡りながら朝御飯。橋に集合しつつあるデッドバスター達には、寝坊したのかと茶化され続けた。

「ほつとけ。」

「いい加減直せよな?!」

「コネで戦士になった奴等に注意したって無駄無駄! あはははは!」

「……。」

ルークは心中、闇に満ちた言動を吐き捨てていた。橋に近い場所に住処があるが、エールが尻尾を抱いているから歩くのが遅くなる。これを考慮しての行動であるが、周りから見たら寝坊にしか見えない。野次は承知で、四人組はこうしているのだ。

「コネ……か。一応、適合者なんだけどね。僕達。」

「まあネ。シス力が特に悪魔化して（変わって）ないから……カナ。」

「ルークとイヴィルは、最初からそうだったからいいんだよ。僕は後からだ。きつと、失明した左目が悪魔化したんだろうさ……。余り変わらないのはそのせいだよ。」

明るく笑い飛ばすシス力は、何処か寂しそうな感じがする。

前回、序章後編では一人だけ悪魔化していると話しましたね？実は、二人だったのです。

保護され、目覚めたルークの目は悪魔の目だった。眠っていたから、ガイアは気づかなかったのだ。

因みに、デッドバスターのポケモンは共通で目が悪魔化。よって、目で直ぐに見分けられるという訳だ。あとの変化には個人差がある。目に関しては、シス力とガイア黒王、オズは例外。

そうこうしている内に基地へ到着。

西地区にだけ存在する、第五ブース。そこにたたずむ赤煉瓦の館がそれだ。十七番目の国、龍の国の王カイリユーが統治するブースでもある。

十七人しかいなかったエリートに、更に三十人のエリートが加わることになったらしい。これで、悪魔に対抗するだけの力がまた増えた訳だ。

ん？三十人の中に、変わったポケモンが潜んでいる。小さな小さな妖精のようなポケモン。Vの字の耳がチャームポイントだ。

「以上が、新たな仲間だ。みんな、共に頑張って行こう！」

「はい！！」

「それと、上級悪魔についてだ……。昨日、チームZ^{ザクル}KLのリーダー、ゾロアークのカルマが上級悪魔と遭遇した。民の救出には成功したが……。奴等の力は生半可なモノではない。上級悪魔については、彼女から詳しく教えてもらうことにする。ビクティニのミラ姫だ。」

三十人の中に紛れ込んでいたポケモンは、ビクティニ。ガイアの前まで、お尻の羽で愛らしく飛んで移動。一礼してから話し始めた。

「デッドバスターの皆さん、おはようございます。ビクティニのミ

ラです。私達、無事に逃れて来た神々の代行が……アンダー研究所で悪魔の研究をしているのは、ご存知ですね？今回は、上級悪魔についての研究報告をします。

上級悪魔は、レシラム様のような大型の悪魔。その力は、神々に等しいモノです。レベル一〇〇のポケモンが何十人と集まっても、勝目はありません。ですが、私達神々の代行が祈りを捧げれば……。勝敗は五分と五分に。あとは、貴方達にかかっています。今現在、祈りを捧げる場所……【教会】という施設を建設中です。それが完成するまでは、任務中に上級悪魔と遭遇しても戦わないで、逃げて下さい。プライドに反するかもしれませんが、退くことも勇気です。どうかお願い致します。」

「……以上だ。みんな！！新入りと訓練所へ向かってくれ！！私は四人組と話してから行く。」

「「?!」」

冷たい視線が、四人組を見下ろしている。エール除く三人は驚き、互いの顔を見渡す。

皆が去ってから、ラルク博士の研究所へ呼び出され二人に着いて行く。恐る恐る中へ入り、待ち構えていたラルク博士とオズを見据えた。

資料や機械だらけ、モニターやコードだらけの空間。優しい笑みを浮かべたオズは、四人組に挨拶。

「やあ。ズキン四人組さん。」

「あれ？オズ、なんで君も？てゆうかいつの間に？！」

「ああ、彼もなんだよ。ね？黒王様。」

ラルク博士は、すかさずオズをフォロー。黒王ガイアは、そうだと頷く。本当の理由は……四人組の話が終わった後で。

四人組が呼び出された訳だが、主にルークとイヴィルに用がある。最初から悪魔化していたという彼等は、いつどうやって悪魔の血を得たのか……。月一尋問を受けるのだが、彼等の答えはこうだ。

「知らねえよ！いつの間にかこうだったんだ。イヴィルだって、なあ？！」

「グルルル。」

「戦闘した試しは？」

「わからんつての。いつまで尋問する気だ？何年間も質問責めはキツイぜ……。」

「マザーコアのスパイという噂もある。お前達二人は、要注意人物なんだ。」

「なんだよスパイって……。じゃあ俺達を助けなきゃよかったじゃねえかッー!!」

「まあまあまあ、ストップストップ。落ち着いて。黒王様、ここは俺が……。」

オズが割って入り、冷静に対応。

「なあ、ルーク。俺から聞いていいか？一応、みんなを説得する役があるからさ。内容は同じだろうが、今一度聞きたいんだ。でなきや、周りのデッドバスターは納得しないだろうし……。マザーのスパイだなんて、俺は思いたくない。」

「……。わかったよ。」

「ありがとう。」

なんとか丸め込み、オズはほっと一息。いつもより穏やかな笑みを浮かべた。

四人の尋問官に、ルークは詳しく説明。いつもの内容を話した。

ルークとエールは、物心ついた時からずっと二人きり。アンダーワールドだなんて知らなかった。そんな時代……。

「荒れ果てた大地……。枯れ木の森を渡りながら、俺達はただただ歩いていた。俺が悪魔化していたのは、その時からだ。悪魔に襲われているシス力を助けて、一人さ迷うイヴィルと戦い……。今の状態に至るって訳さ。」

「イヴィルは最初から？」

「嗚呼。この姿で出会った。」

そうか。そう言って、オズは引き下がる。

「ありがとうな。」

「話しはそれだけじゃありませんわ。」

ビクティニの姫、ミラは五人を見渡し言った。絶対に無謀な挑戦をしないでくれと。

「貴方達は、幾多の逆境を無理矢理乗り越えて来たと聞いています。あと、黒王も。」

「うぐつ。わ…私は…えつと…。」

「貴方達には、強く念を押しておきます!!上級悪魔を倒す手掛かりはありません。私達が祈り、直接、ディアルガ様とレシラム様を手助けし……加護を増幅するしか無いのです。だから、任務中に出くわしたら逃げて下さいッ!!いいですね?!!」

「「は……はい。」」

「わかればいいのです。」

ビクティニの小さな体から放たれた気迫に、四人組も二人の王もたじたじ。本当に無茶しないでよ？と、ラルク博士は彼等に言う。

「よ……よし。次に、四人組には悪魔の階級について学んでもらおうか。博士。」

悪魔については、本来なら訓練施設で学ぶもの。四人組はまだ知識不足で、黒王が時間のある日に勉強をするのだ。

「悪魔には三つのタイプがある……。これは以前話したな？複数のタイプを持っていたりはしない。しかし、ポケモンを喰っているが故にタイプエネルギーが蓄積している。これは、最近の研究でわかった事だ。」

「つまり、ポケモンと同じような弱点があるんですね！」

「シス力、正解だ。けれど、それは上級悪魔だけの話し……。悪魔には階級がある。初級、中級、そして、今回新たに現れた上級悪魔。階級が上がるに連れて、レベルの上限が変わってくる。我々が使う技には限界があるが、寄生兵器に技タイプエネルギーを注ぎ入れれば、より強力な技を発動できる。」

「上限はだいたいどれくらいなんだ？」

「初級は、三〇〇〜約九〇程度。中級は、約一〇〇〜約一五〇。それ以上が上級。中には、二〇〇を超えるレベルの悪魔だっているだろう……。」

ガイアは自分が言ったことをおどましく思った。これが悪魔。無限に成長するのだと、彼は改めて知った。オズも、ラルク博士も、四人組もだ。

「カルマが出会った上級悪魔は、ケルベロス。岩の体を持つ悪魔だったらしい。」

「超小型通信機で、彼が写メってきた映像があるよー。」

メインコンピュータに向かい、ラルク博士は映像をモニターに移す。

ケルベロスは、岩の狼。尾は三匹の大蛇だった。大蛇は岩の体ではなかったのが、ガイア黒王は気掛かりらしい。

「上級悪魔については、まだ研究しはじめたばかりだ……。もしかしたら、悪魔としてのタイプは一つだけでも、蓄積したタイプエネルギーは複数所有しているかもしれない。そうになると、戦いはより困難なものになる。……ルーク。」

「おう。」

「私もだが、絶対無茶はするな?! エールは、お前がいなくてはならないんだろう? 絶対に死に行くような真似はするな!! わかったな?」

「言われなくてもわかってるさ。エールは一人にさせない。ずっと一緒に。な? エール。」

ルークが振り返ると、エールは尻尾を抱いて頬擦りしていた。赤ん坊のようなエールを見て、ルークは微笑む。

やれやれだな。と、オズは早々と外へ。ガイアに止められると、散歩したらまた来ます。と言っていなくなった。

「気まぐれ屋め……。」

「四人組、今日はもう訓練に行きなよ。黒王は、まだ僕達と話があるからあとから。ね？」

「嗚呼。先に行つてくれ。」

一礼して、四人組は研究所をあとにする。研究所の外では、物陰に隠れて四人組が去るのを待っていたオズが。一息ついてから、中へ入った。

「ふう。」

「こつちの台詞だ。さて……。ここから先は極秘会議だな。ちょうど、セルフイオが回線に入り込んで来たようだからな。」

黒王ガイアは、『M?』と表示されている一つのモニターを指差す。モニターから、男性の笑い声がした。

「流石だな！機械でもさっそうと気づくだなんて……。」

「私は耳が良いからな。ちょっとした音でわかるんだよ。……それより話したな。」

三人の王とラルク博士、ミラ姫の極秘会話が始まった。内容は、神々の代行についてだ。

神々の代行……。それは、文字通り神々の代わりに働くポケモン達のこと。神の数より多く存在し、各地で民と暮らし、常にみんなの心の支えとなっていた。災害があれば駆けつけ、暮らしが困難なら知恵を与える。時には自分達の力を使って、みんなを助ける。それが仕事。

今は、悪魔の魔の手からポケモン達を守るのが仕事だ。代行の半数は、まだ外界で取り残されたポケモン達の救助活動をしている。デッドバスターへ完全に引き継ぎをするのではなく、代行は代行なりにデッドバスター達の手伝いをしているのだ。

「みんな、危険は承知。もしものがあつたら、通信石を壊すように言ってますから。」

「え?!壊しちゃうの?。」

「そうすれば、代行全てのクリスタルが赤く輝きます。それで判断するんです。ラルク博士。」

「はいはい。」

「早速ですが、外界の代行達からの救難信号があつた場所をモニターに……。」

「了解。」

セルフィオがハッキングしたモニター以外、モニター一つ一つでパズルのように巨大な地図を作る。この大陸は、アスナ口地方。かつて火の国があつた場所だ。

「赤い丸印がある場所から、救難信号があつたんだ。つまり、クリスタルを壊したってこと。」

送り主は二人。ランドロス陸神様^{りくがみ}と、鋼の賢者コバルオン。ミラ姫、理由は？」

手持ちのパソコンを開き、博士はミラ姫の話をメモ。片手タイピングなのに凄いスピードだ。

「ランドロスは、悪魔に祠を壊されて脱出不可能になったそうです。コバルオンは……私達ではわかりません。何があったのでしょうか……。」

「姫、コバルオンは代行なのですか？」

「違います。セルフィオさん。彼は神帝様の木を守る賢者。聖なる木、と言えばわかりますね？」

聖なる木。それは、アルセウスの木とも言われている光色の神木のこと。世界各地にあり、悪魔はこの木の光を苦手としている。それゆえ、現在は避難所とされている。本当の存在意味は、誰も知らない。

「賢者は、代行と民が着くまでここを守るのが仕事。なのですが……彼に渡したクリスタルが壊れたということは、悪魔が……。」

「何はともあれ、私達の出番だ。オズ、今回はお前も来い。」

「わかったである。」

団結する二人に、ヘルプが来るまで、また研究をしているか……。と、セルフィオは去る。

彼は不適合者。でも、寄生兵器を生み出した第一人者としてデッドバスターをしている。肩書きだけで、普段は自室の研究室に籠りっぱなしだが。

「また物騒なモノを作ってるであるかな？セルフィオ。」

「知るか……。他のデッドバスターには話せない極秘任務だ。夜に出發しよう。」

「了解なのだ。では、余は基地の訓練所へ向かう。早くしなきゃ皆が不満に思うからな。」

にかっ！と笑い、オズは早々と去った。一息ついたガイアは、ラ

ルク博士から回覧板をもらう。回覧板には、名簿が貼ってある。今は十七人しかいないが……。これを使って、今日の任務にあたるデッドバスターを選ぶのだ。

今日の任務は、シエリア地方エリア二。水の都と言われていた国だ。

「……。シスカとミズキにしよう。あの二人なら、多少の危険も切り抜けてくれる。博士、早速呼んで下さい。」

「はいはい」

本線基地・訓練所

ルークは、エールと兵器を使う練習中。せめて、ルーク達を守るようにと黒王から言われている。柔道の試合で見かける床を使って、二人は組み手を続けた。

「ちゃんと盾を顔まで上げて！！危ないぞ？！」

「う……うん。」

ピンポンパンポーン

『お呼び出しをしま〜す！チーム悪党のシスカく〜ん。チーム泉のミズキちゃ〜ん。出番ですよ〜 僕の研究所まできつてねえ〜』

陽気なコールが訓練所に響き渡る。デッドバスター達は、思わず苦笑い。訓練しながら聞いていた者は、笑いを耐えるために皆が立ち止まった。ちょうど、シスカとミズキは激しく戦っていた。

「ストップ。……呼び出し。」

「そうね。行きましょうか。独眼のズルズキンさん。」

「フフ。」

険悪なムードなのに、シスカは笑った。急いで研究所まで向かう

二人は、スピードで張り合っていた。

「ついた。ワタクシの勝ちですわね……。」

「みたいだね。」

中へ入ると、いつもの出迎え。ラルク博士の呑気ぶりは、場違い過ぎていつも対応に困る。他のデッドバスター達だってそうだ。

「黒王様、お待たせしました。水の国の姫、ミズキ。ただいま着きましたよ。」

「口調が母に似てきたな……ミズキ。ビアン王女は元気か？」

「ええ。今回の任務はなんですか？」

「今回はシェリアへ行ってもらおう。任務は、スワンの森にある【海の宝玉】を悪魔から取り返すことだ。」

「宝玉を飲み込んだってー。で、宝玉を飲み込んだ悪魔は中級階級。群れのリーダーだね。未だ暴走を続けているから……ダンジョンの悪魔達も凄く凶暴だよ。気をつけてね。」

「はい!!」

ラルク博士はメインコンピュータに向かう。ぽちつとボタンを押して、部屋の右壁にある鉄の扉を開けた。中には、白く光るモンスターボール型の台。ドサイドン二人分の大きさをしているため、かなり巨大だ。

「二人共、予め武器を出してね。」

まだ寄生兵器を出していない二人は、左胸に手を当てる。黄緑色に光輝く胸から手を離すと、粒子が手元に集まってきた。ミズキは粒子を体に纏って武器化。シス力は、手元にある状態で武器化させた。

「悪のレイピア。装備完了。」

「水の羽衣。装備完了ですわ。」

「よし……。行き先、座標J三〇七。シェリア地方エリア二の集落。デッドバスター、転・送っ！！」

手持ちパソコンのエンターキーを押して、機械を動かす。まばゆい光りに包まれて、二人はあつという間に集落に着く。赤い布で出来た、大きなテントの中だった。

「さて……。このリーダーに会いましょう。ワタクシの足で惑いにはならないで下さいね？シスカさん。」

「足で惑い？大丈夫。ならないよ。たぶんね。」

デッドバスター基地
オペレーションルーム

巨大なモニターの前には、大学にありそうな席。全部で十段のこの席には、パソコンに向う百人のポケモン達。みんなエスパーパータイプ。

ここで、任務中のデッドバスター達の位置やステータスを管理。悪^{タイ}魔^{ゲット}の確認をすることも可能だ。

この指揮官は、セルフィオ帝王。任務がある日はここで仕事をしている。一人、ど真ん中の席で巨大モニターを見つめていた。

鬼が出るか蛇が出るか……。藍色の玉は無事か否か……。さて、レシラムとディアルガにコンタクを取るかな。

かくして、最初のミッションがスタートするのだった。次回、シスカとミズキの活躍にご期待下さい。

T o b e N e x t

一章：四人組と悪魔（後書き）

【次回予告】

レシラム

「悪魔に立ち向かう、デッドバスターのポケモン達……」。

私達はただ、彼等を見守ることしかできない。無慈悲だとわかっていても。

次回も祈りましょう。

愛しい子等に、希望の光を。」

二章：死んだ世界

シェリア地方の集落、エリア二。

到着した彼等を出迎えたのは、丸い盾を持つドレディア。草の国の姫で、母が不適合者のため生まれつき技が使えない。

「ミズキ姫！お久しぶり」

「久しぶり。その様子だと、大丈夫そうね。任務のため、情報が欲しいのだけれど？」

「海の宝玉を取りに来たのね。わかったわ！情報小屋へ行きましょう！」

小走りでログハウスに向かう彼女を追い、中へ。情報小屋と言われるこの場所は、ラルク博士の研究室よりひどかった。

狭い部屋に五台のパソコン。本と紙束の山でほとんどスペースが埋まっている。しかも、床には無数のコード。迂闊に歩くことができない。

「バーバラ。バーバラいらっしゃる？デッドバスターが到着しまし

たよ！」

「はいはい。」

紙の山がゴソゴソ動いている。ぼんっ！といきなり顔を出して登場するは、グルグル眼鏡のバリヤード。波を掻き分けて、三人の前にやって来た。

「あら？貴方、アルランダ地方の集落でもお会いしていませんか？」

「ああ、それはオイラの再従兄弟か従兄弟だね。オイラ達は、一族で悪魔研究家をしているんだ。」

バーバラは、デッドバスター達に写真を見せてあげた。見た感想
といえは……。

「全員、バリヤード……。」「」

「ね？右端にるのが、アスナロのバーバラ。あと、後ろにいる彼も。オイラはこれね？……さて、お喋りはこのくらいにして、情報提供しなきゃね。ちょっと待って！」

再び紙の山にダイブ。無数の原稿用紙が宙を舞った。

あれ？と思った方のために説明しましょう。アルランダは火の国、アスナロ……と、バーバラは言いましたね。これはエスパーの国特有の呼び方、言わば訛った呼び方なのです。エスパーの民は、アルランダのように詰まった発音が少し苦手。そのため、言いやすい発音に変えて呼んでいるのだ。

「ちょっと、あの人大丈夫なの？」

「大丈夫よ。エスパーの中でトップクラスの個体値を持つ一族ですもの。」

「個体値？」

疑問に思ったのはシスカ。ミズキは彼を嘲笑い、個体値について教えることに。

「あら、そんなことも知らないの？聞いて呆れるわね……。私達ポケモンには、生まれ持つ才能があるの。私達デッドバスターは、それを【個体値】と呼んでいるわ。ゼロから六の数値で表すことができる、記号はVを使うの。ちなみにワタクシは四V……。」

「四……。強いな。」

「個体値は、親から子へ受け継がれるもの。デッドバスターなら知って当然でしょう?。」

冷やかか目で、ミズキはシスカを見やる。シスカ本人は、苦笑いするしかなかった。

「お待たせー!。」

最初と同じ登場をし、バーバラは三人の元へ。紙と紙をくっつけてできた本を持っていた。

「えっと、ダンジョンはスワンの森だね。ここには、レベル七〇か

ら一〇二の悪魔がいるよ。

写真見て。このカラス頭のサルは、ガーマンと呼んでる初級悪魔。スピードが早いから、ズルズキンのシス力は気をつけてね？

次にコイツ。ゾンビ魚人。毒水を自由自在に泳ぐことができるパワー型悪魔だよ。腕にあるヒレは鋭いカッター……しかも毒針がある。川を背にしないよう心がけて。

さて、基本レベルはこれくらいかな？本丸はコイツだよ。」

パラパラとページをめくり、ターゲットとなる中級悪魔を見せる。写真ではなく、白黒のスケッチだった。

このスケッチを見て、デッドバスター達は目を疑った。こんなことがあっていいのか？だってこの姿は……！！

シス力は、現実を受け入れることができなかった。

この悪魔の名はヘルオーガ。カイオーガに瓜二つの姿をしている、スワンの森の悪魔を仕切るボス。

バーバラは、宝玉を飲み込んでこの姿になったのではないかと睨んでいるようだ。宝玉を飲み込んだことで、この星のありとあらゆる水をいのままに操ることが可能になった。ヘルオーガが原因で、毒の水が世界中を被い尽くしたのだ。

「ヘルオーガから宝玉を取り返せば、川も海も元に戻せるかもしれない……。こんなに似てるから、抵抗感があるのはよくわかる。けど！」

「言わなくていいよ。わかってる……。」

レイピアを握りしめ、シスカはスケッチのヘルオーガを睨み付けた。

「僕等がやらなきゃ、世界は死んだままなんだ。アルセウスが愛したこの世界を、何があっても守らなきゃいけない！やるよ。僕は行く……スワンの森へ！！」

「ワタクシだって戦いますわ。ここは、ワタクシ達水の民の国ですもの！」

「ありがとう。独眼のズルズキン。スワンナの姫様……。ヘルオーガは、ダンジョンの奥地にある【スワンの泉】にいる。道中気をつけてね？」

情報小屋を出て、シス力達は青いテントの中に。棚いっぱいアイテムが置かれていた。

「ここは？」

「ええ?!まさか、アイテムテントすら知らないの?!もう、どれだけ無知なのかしらッ!!」

ここは、アンダー研究所から転送されて来た武器や、ダンジョンで拾ってきたアイテムがある場所。アイテムテントよ。回復薬と交換して入手するの。回復薬一つにつき、三つまでもらえるわ。……貴方達四人組って、まさか装備品を使わないの？」

「うん。ルーク達といると、真っ直ぐダンジョンに入って行くからね。初体験ばかりで楽しいよ。」

笑顔のシス力を見て、ドレディアも呆気。二人で目を皿にして、ぽかーんとしている。ズルズキン四人組のバスター活動は、大仰天どころではない超危険なモノだったようだ。

「普通死ぬわよ……貴方。」

「そうね、危ないわ。」

「あはは。……で、人は？」

「ここでーす！」

入口から向かって正面。アイテムに紛れている二人の小さなポケモンがいた。棚に腰かけ、手を振っている。この二人は、カメールとハスボー。この地方のダンジョンを巡りアイテムを集めてくる探索隊だ。

「何にしますかー？」

「そうね……。鉄のプレートと、悪魔の爪を二つつつ。神秘の雫と、この独眼さんにチェーンの鰻を一組あげて。」

ミズキが勝手にオーダー。次からは自分で決めなさいよと、ふてぶてしい顔を見せつける。シスカがお礼を言うものだから、あたふたと次の態度を考え込む。とりあえず、ミズキはそっぽを向くこと

にした。

陽気な声でハスボーが到着。頭の葉っぱにアイテムを乗せて歩いて来た。

ここで、アイテムの説明を致しましょう。

鉄のプレート。厚さ一五センチの四角いプレート。真ん中に半円ドーナツの持ち手があり、盾にできる。ただし強度が低いいため、三回防御したら壊れてしまう。

悪魔の爪。見たまんま名前のまま。悪魔の赤い爪だ。先制の爪より発動確率は低いが、攻撃力を三段階上げてくれる。

チエーン of 鎧。剣を扱うバスター専用アイテム。装備すると、防御力を少し上げてくれる。アンダー研究所の発明品だ。

神秘の雫は……みなさんわかりますね？

「ありがとう。」

「頑張つて来ますわ。」

「はい。回復薬ありがとうございますー！ご無事を祈ってますね！」

アイテムを装備し、回復薬を渡す。デッドバスターとドレディアはテントを出ことに。

「よいしょ。……あ！貴方様は！！！」

ドレディアを驚かせた相手は、レジスチル。全ての代行ポケモンを統べる王、レジギガスの忠実な下僕^{しもべ}であり、民を守る賢者。なにやら、大事そうに何かを抱えている。

「私物ヲ整理シテイタラ、コレガ出テキタ。御守リニ持ッテ行ッテクレ……。キット役ニ立ッ。」

手渡されたのは、【青いウロコ】。レジスチルの手から取って見ると、風景が微かに透けて見えた。綺麗な青に染まったそのウロコの正体……ミズキはわかっていた。

ズシ…ズシン

渡し終わって直ぐ、レジスチルは無言で去っていった。ゴーレム故、コミュニケーションはこの程度。けれど、彼の後ろ姿から伝わってくる。闇に対する不安と恐怖、悪魔への怒りが。

「……さあ、装備できたことですし。ダンジョンの入口へ案内しますね。ついて来て下さい。」

スワンの森入口

枯れ木だらけの樹海、ひび割れた大地……。ここが、今現在の世界だ。川は清水ではなく毒の水が流れていて、コイキングやバスラオの白骨死体が浮いている。少し奥を覗いてみると、ポケモンの死肉が転がっていた。

「うう……腐敗臭で鼻が曲がる。」

「男なら耐えてみせなさい！」

「わかってるよ。日が落ちたら、何があっても戻らなきゃね……。夜は、悪魔の力が高まる時だから。」

森から目を離し、後ろのドレディアにお礼を言う。「ご無事で。と、ドレディアは精一杯の応援で二人を見送った。

この様子は、オペレーションルームからも確認されている。今現在、巨大モニターにはプレシャスボールが映っている。最初はゴージャスボールなのだが、デッドバスターがダンジョンへ侵入するとプレシャスボールに変わるのだ。

セルフィオ帝王は、迅速な指示でポケモン達を指揮する。

「上空で待機している飛行カメラを起動、ダンジョンマップを映せ！
！出動したデッドバスター達のステータスを急げ！！」

「飛行カメラ、起動！悪魔サーチシステム、オート設定。マップ及

びステータス、モニターに映しました！」

慌ただしいオペレーションルーム内……。僅かな光に照らされた壁には、揺らめく影が。この影はおそらく、黒王ガイア。気づいていないセルフイオは、再びモニターを見つめる。大量にいる赤い丸と、二つの青い丸がうごめく光景。シスカ達は悪魔と戦っているのだ。

「頑張ってくれ！デッドバスター……！！」

「お前もだろう？」

傍らから声。あからさまに驚いた仕草をするセルフイオに対し、笑っているのはやはり彼。

「ガイア……。いたのか。」

「いたさ。状況は、こちらの優勢みたいだな。」

「ああ。けどいいのか？四人組は、全員そろわなきゃ力を発揮できないんだろ。これでシス力が死んだとなれば……。」

終始無言。ガイアは何も言わず、辺りは沈黙に染まる。

「……。……？！」

「セルフイオツー！」

「わかってるッー！」

一触即発の事態か？！ガイアは影となり、闇の中を掻き分けて外へ。デッドバスター基地へ向かった。

一方セルフイオは、机の裏を膝で蹴り上げ、内蔵されている非常システムを無理矢理立ち上げた。白いキーボードが現れ、自身の周りには無数のモニター。マイク付きヘッドホンを首にかけ、タイピング開始。

この時、二人王の形相は、焦りと不安に満ちていた。

スワンの森

ガーモンの群れに取り囲まれたシスカとミズキ。運悪く、バラバラになってしまつて協力できない。盾を構えて、防御の態勢。シスカの盾には亀裂が入っている。もうあとが無い。

「……来い！」

シスカの挑発で、雄叫びを上げて迫り来るガーモンの群れ。ミズキの方も同様だ。

レイピアを地面に突き刺し、毒エネルギーと炎エネルギーを注ぎ入れる。二つ同時に、シスカは少し苦しそう。

「ぐ……ッ！！うおおー！！！」

レイピアが激しく輝き、ガーマン達の真下で大爆発。紫の炎が燃え上がり、身を焦がす。その真ん中で、シス力は剣に身を委ねる。呼吸は荒く、ぐったりしていた。燃える炎の中からは断末魔の叫び。目に映るは悲惨な時代劇。左目が、妙にうずいた。

「……………」

saidミズキ。迫り来るガーマンをはね除けるべく、水の羽衣を脱いで武器に。リボンのように扱われる羽衣は、見事に悪魔を遠くへ飛ばした。シス力の炎の中へ転がる奴もいる。

「あなどらないでくださる？」

赤い光を纏い、再び羽衣を着る。ミズキは天高く飛び上がって、シス力の状態を確認した。

もうバテてる。仕方ないわね。

「“ブレイブバード”！」

ガーモンに向かって突っ込むミズキ。捨て身の体当たりは一発でガーモンを倒す。まだまだと攻撃を続ける内に、体力が減っていく。“ブレイブバード”を繰り出すと、自分にもダメージが蓄積してしまふ。言わば諸刃の剣だ。

「いけない！……きゃあ！！」

動きが鈍ったところをガーモンに襲われ、翼が折れた。地に落ちて、首を握りしめられる。

「シス……カ……！！」

「ミズキ！！どうしよう……炎が止まない……。あーッ！！僕の馬鹿……！！」

レイピアを抜き取って、炎の中へ身を投げ出す。火だるま状態で、ミズキを襲うガーモンにレイピアを投げつけ……。たはいいのだけでも。

「あつっ！ーあち、あーちちちちちッ！！」

自滅フラグ。

「ホント仕方ない人。」

走り回るシスカに狙いを定め、“水鉄砲”をしばらく浴びせた。

シューウウウ

「おさまったわね。」

「ありがとうミズキ。死ぬかと思ったよ。」

「そのオツムをどうにかしなさい。少しはマシになってもらわないと、ワタクシの命だって危うくなるじゃない?!」

「ごめん。」

オペレーション ルーム

ステータスゲージ、ミスきはマイナス二〇のダメージ。シスカはもう半分。

危機一髪。セルフィオ帝王は机に寝そべって、ヒリヒリする膝と戦っていた。

一番上の段、隅っこの席でヤドキングが手を合わせている。御愁傷様と言いたいらしい。

「焦らすな……。膝が…皿が割れるかと……。」

「けっこう手荒い対応だったからな。」

ガイア黒王の姿あり。あの光景を見た第一人者は、ニヤニヤ笑ってモニターを見ていた。

「通信機をかせ。」

超能力で通信機をレポートさせ、右手を差し出すガイアに渡す。ぐったりしたまま、唸りっぱなしのセルフィオであった。

「力使い果たすなよ？明日の夜に任務だ。」

「うム……。」

スワンの森

悪魔はまだいる。

倒したガーマンからレイピアを抜き取って、構える。懐から回復薬を取り出して食べ、まだ余裕だと見せつける。

「来るわよ!」

「モグモグ……。」

向かって行く、デッドバスターと悪魔。刹那の一撃がぶつかり合い、血泣きと踊る。正義の殺戮劇は、赤く美しい花を散らせて終盤へ。

花弁にまみれたシス力は、ゾンビ魚人に後ろを取られてしまう。斜め下を見ると、川が。

「うああッ!!」

背中を切り裂かれ、瀕死状態に。シス力は、気絶して倒れてしまった。

「シス力ア!!」

「諦めるのは早いぜ?」

ゾンビ魚人の背後から、声。魚人の背後には枯れ木しかない。ミズキは、その枯れ木を見つめていた。

魚人の背に手を当てる何か。ニヤリと笑って、技名をつぶやく。

「ナイトバースト”。」

瞬間、森に再び大爆発が起きる。赤い稲妻を帯びた黒いドームは、集落からも見えている。

「あれは、“ナイトバースト”？」

「リリア姫ー！」

赤いハチマキを付けたピカチュウが、携帯電話（通信機）を持ってドレディアの元へ。

黒王からだど、ピカチュウは言う。通信機を受け取り、ドレディアは黒王と対話。

「エリリーダー、リリアです。」

『私だ。緊急事態により、デッドバスターをもう一人派遣した。名はカルマ。ソロアークだ。』

「緊急事態?!……………はい。……………はい。わかりました。失礼します。」

通信を切り、森の方角を見つめるドレディア。ピカチュウも一緒に、森を見つめた。

「神帝アルセウスよ……。生きていたら、どうか、彼等をお守り下さい。」

スワンの森

「ふい〜……。大丈夫かい？」

“ナイトバースト”が止み、現れたのは黒銀のゾロアーク。カルマ。毒水に触れないようにと、幻影の……。何故かソリに乗っている。雪があれば子どもが遊ぶだろうに。

彼の技からシス力を守るため、ミズキは盾を構えていた。

「なんで、貴方が？」

「ん？なんか急に、黒王様が緊急派遣だって言ってさ。助けに来たという訳。よろしくな！……。さて。」

降りて、幻影を解く。シス力の元へ歩みより、傷の具合を冷静に確認。ミズキも一緒になって見守る。

大きくえぐれていて、若干骨が露出していた。

蠟に手を突っ込み、コルク栓でフタをした小瓶を取り出した。中には、黄緑の液体が入っている。

「液状回復薬だ。支給される固形の回復薬とは違って、傷口にかけると細胞分裂を活性化させるんだ。止血の際によく使ってる。……見てな。」

栓を抜き、液体をシスカの背中にかける。傷口はみるみる小さくなり、いつの間にか止血もされて綺麗に無くなった。

「あとは、普通の回復薬を飲ませるだけ。てか、まず起こすか。シスカ、シスカ起きんしゃい！」

ビンタで起こされ、シスカは痛そうに起き上がる。背中の傷が無くなっていて、更にカルマがいてビックリ。手短に説明を受け、とりあえず回復薬を食べる。

「さ、行こうか。もう少しで泉につく。早いところ終わらせようぜ？……シスカ。」

「うん？」

「まだ液体の余ってるからさ、お前の左目にかけてやるつか？ 治るぞ。」

「い、いいよ。僕はこのままがいいんだ。」

「そ……。じゃあ出発！！」

クリスタルの鎌片手に、意気揚々と歩き出すゾロアーク。カルマ。二人も後を追って歩く。

「枯れ木は毒水を吸って、色が黒く変色。川には白骨死体。ちよつと歩けば……腐敗したポケモンの死肉がゴロゴロ。死んでるなあ、この世界は。なんとかしなきゃならねえよ！」

呑気に背伸びをするカルマに、ミズキは冷ややかな目を向ける。場違いはラルク博士で十分だと怒った。

「貴方って人は……」

「静かに！」

鎌を構え、何か聞いている。耳をすませると、悪魔の鳴き声が聞こえてくる。

普通の悪魔は、赤ん坊の声やライオンの声で鳴く。しかし、聞こえているのはそれとは違う叫び。

オオーン……

「まだだ。泉からってことは、ヘルオーガ?!」

「行きましょう!」

オペレーション
ルーム

非常事態のブザーが鳴り響いているこの場所で、ガイアが行くなと叫んでいる。個人のモニターで作業をするポケモン達も、慌ただしくしている。

「泉から、強力なエネルギーを確認！一〇二、九……え、エラー？！セルフィオ様、計測不可能です！！」

「レベル一五、二〇、四七……。なんで？！レベルが上がっていく……」

「悪魔はいい！宝玉の状態を確認しろ！！」

「セルフィオ、これは……。」

「お相手は【上級悪魔】とはな！！一枚噛まされたツ！！」

ガイアから通信機をもらっていたセルフィオ。裏を開けてキーボードの横に差し込むと、カルマへ着信を鳴らした。

「セルフイオ帝王!!」

「何事だ?!」

「宝玉の状態がわかりました!今、そちらのモニターへ転送します!」

モニターを見つめ直す二人の王。セルフイオが送られたデータを解析し、更に詳しく調べ上げる。

「……………な?!」

「手遅れだったかッ!!宝玉が、完全に汚けれている!!まずいぞ……。カイオーガ様は、もしかしたら……。」

モニターに映る、三つの青い丸。泉の中へ侵入したデッドバスター達は、ゆっくりと奥地へ入って行く。泉の中へ侵入したデッドバスター達は、ゆっくりと奥地へ入って行く。罨とも知らず……。

To
be
Next

二章：死んだ世界（後書き）

【次回予告】

レシラム

「死んだ世界……」。

汚れた宝玉……。

力を温存していたために、上級悪魔と気づかなかったデッドバスター達。

このままでは……！！

次回も祈りましょう。

愛しい子等に、希望の光を。」

三章：緊急ミッション！宝玉を奪還せよ！！

遠く離れた地方。無事に保護されたであろう、傷ついたポケモン達が集落に集まっている。彼等を先導してきたのは、下半身が雲に隠れている緑のポケモン……トルネロス。片足を失った一人のケンタロスを支えていた。

「もうすぐ集落だからな。」

「はい。」

ふと、正面へ振り返るとハピナスがこちらへ向かってきている。救護班の者だろう。

「お勤めご苦労様です！風神様！」

「ワシが連れてきた民は、この者で最後だ。あとは任せてよいな？」

「はい！」

ケンタロスをハピナスに預け、トルネロスはまた民を探しに行った。時速八〇キロのスピードで、上空から念入りに見て回る。

トルネロス！！

「?!」

清らかな声がトルネロスを引き止める。声の主は、男性。トルネロスは血相を変え、主の名を叫んだ。

「ディアルガ様?!」

トルネロス、今すぐスワンの泉に向かってくれ！！時の流れが、どンドン闇へ向かっているのだ！！

「闇に……?! 承知しましたッ！！このトルネロス、無事に辿り着いてみせます!!」

時速三〇〇キロのフルスピードで、トルネロスはスワンの森を目指す。ディアルガからの説明を受けながら。

所変わって、スワンの泉。モンスターボールを模した巨大な泉だった。足場は、中央の丸い部分。さっきまでの咆哮は無く、ヘルガーの姿さえ見えない。

「やけに静かだな……。」

「泉が……。聖なる水が、毒の水に……。」

ミズキは、変わり果てた泉を見て落胆。話しでしか聞いていないから、本来の姿はわからない。だけど、どれほど立派な場所だったかは想像できる。ミズキは、怒りで闘志を燃やす。

コココココ……

突如地面が揺れた。デッドバスター達は足場で跪き、揺れに耐え

ている。

揺れにより、岩壁が崩れて落石。運悪く、出入口の方でそれは起きた。退路を断たれたデッドバスター達は、畏だということに気づく。気づいた頃に、カルマへ通信が入った。

「はいはい。」

『セルフイオだッ！！今すぐに戻れ！！相手は上級悪魔だったんだ、畏にかかる前に……』

「申し訳ありませんが、もう手遅れです。できれば……戦闘許可を下さい。あと葬儀。やれるだけやりますが、死ぬ気満々なんで……俺等。」

縁起でもないことを言い、カルマは通信を切る。そして、相手为上級悪魔だと二人に話した。

【上級悪魔】と聞いても、二人に驚きの色は無かった。むしろやる気になっている。

「やろう！僕等だけでも！！」

「カイオーガ様の泉は、このワタクシが取り返すわ！どのみち、宝玉だって回収しなきゃいけないんだしね。」

頭をかきむしり、カルマは苦笑い。「じゃあやるか？！」と、立ち上がり鎌を構える。カルマに続き、二人も戦闘態勢へ。ヘルオーガの咆哮が泉に響き、地震がピタリと止んだ。

毒の水柱が立ち、中から巨大な悪魔が現れる。その姿はカイオーガに瓜二つ。背ビレは一つ。サメのヒレに、手のような左右のヒレは鎌。濃紺の皮膚をした、赤い三つ目のシャチ……ヘルオーガ。飛び上がったヘルオーガは、そのまま真下へ落下。毒の水をデッドバスター達に浴びせた。

「くッ！！」

「うわっぶ！！」

「きゃああー！」

水を浴びたデッドバスター達の目の前に、ヘルオーガが再び現れる。三つ目がにやりと笑っているような、そんな気がした。

「こんのおー!」

ミズキの“水の波動”。真っ直ぐ走る波動は、ヘルオーガを直撃。衝撃で煙が立っている。痛そうにするヘルオーガだが、煙が晴れてみるとどうだろう……。

「無傷?!」

「次は僕の番だッ!」

レイピア片手にシスカが走る。格闘エネルギーをレイピアに注ぎ、ヘルオーガへ剣先を向ける。

「はあああッー!」

鎌のヒレで防御し、ヘルオーガはシス力を弾き飛ばす。飛び石のように転がり回り、シス力はあるという間に傷だらけ。

傷には血がにじんでいて、膝部分の皮が破けて穴が空いてしまった。

「う……うう。」

「シス力！」

駆け寄ろうとする二人に、異変。突如目眩が襲いかかった。鎌を地面に突き刺し、武器に寄りかかる。カルマの脳裏には、浴びた毒の水が移る。ギリギリと歯を噛みしめ、状態異常になったと悟った。

「毒消しはちょうど三つ……。けど、この水の濃さからして猛毒どころじゃねえよな。完全には抜けないかもだが、ミズキ！」

カルマの呼びかけに振り返って、毒消しの固形薬を投げ渡される。

「俺が時間を稼ぐから、シス力を頼む！お前の分の毒消しも渡した

から、飲んどけ。」

自分も毒消しを飲み、鎌を引き抜いてヘルオーガへ迫る。

「いくぞ偽者ーッ!!」

迫り来るカルマ、ヘルオーガは口から氷の矢を放ち、行く手を阻む。

華麗に舞い踊り、矢を粉碎して進む。プロの意地を見せつけるカルマ、一定距離を置いてナイトバーストを放つ。

爆風からシス力を守ろうと、ミズキは彼を抱き抱えた。
ナイトバーストが止み、カルマはヘルオーガを見据える。右目を潰しただけで、ほとんど無傷だった。

「やるな……。」

大ジャンプし、カルマはヘルオーガの背に。刃を突き刺し、切り刻もうとした。うめき声を上げ、ヘルオーガも負けじと抵抗。カル

マを振り落とそうともがいた。

「オオーンッ!!」

「ぐっ……がッ!!」

ヒレに捕まり、振り落とされまいと耐える。鎌に高エネルギーを流し入れ、更に深く刃を食い込ませる。バランスはいつ崩れてもおかしくない。

「“破壊光線”ッ!!」

鎌の刃から光線を放ち、カルマは直ぐに力尽きる。ヘルオーガの動きも止まり、吐血した。シス力を引きずり、ミズキは素早く避難。真っ正面からの血の雨を避ける。

雨が止み、カルマの安否はいかに……。

「カルマさん!!」

「……ああ、大丈夫。生きてるよ。」

鎌を引き抜き、再び大ジャンプ。ミズキの目の前に着地した。

「まだ生きてる！気は抜けないぜ？シス力は?!」

「大丈夫……。今、立つから。」

ゆっくり起き上がり、レイピアを構える。再度戦闘態勢に入った三人を睨み、ヘルオーガは怒りの咆哮を浴びせた。ハイパーボイス並の空気振動が真つ正面から襲いくる。思わず腕を顔の前でクロスさせ、防御態勢に切り替えてしまう。

水中へ潜り、ヘルオーガはどう戦つか戦略を練り直し始めた。それを知らない三人は、背中を合わせて回りを見渡している。

刹那。ヘルオーガは水中から飛び出して、上空から足場へ突っ込んで来た。間一髪で避けたデッドバスター達だが、水中へ投げ出さ

れ、毒にやられ意識を失ってしまふ。足場は崩れ、立つ場所が無くなった。

大胆な攻撃をしたヘルオーガだが、頭を引き抜き、腹を引きずって水中へ。デッドバスター達を喰らおうと、大口を開けて迫り始める。

最早、絶対絶命の危機！

……………めろ……………

ヘルオーガの動きが止まった。奴の脳裏には、美しいポケモンの姿がある。

それ以上、地上の民を傷つけるなッ！！

ヘルオーガの体内。どす黒く染まっている海の宝玉が、突如青く輝き始める。するとどうだろう……。デッドバスター達の周りの水が浄化されたではないか。これを見たヘルオーガは、豆鉄砲をくらった鳩のように驚いている。

気を失っていたミズキ、一人目覚めて辺りを見渡す。そして、お守りの青いウロコを取り出して見つめた。ウロコは、青く美しい光を放っていた。

……カイオーガ様、まだ生きているんですね！

目をうるうるさせ、ウロコを抱く。
しばらくして、ヘルオーガを強く睨み付け叫んだ。

「ヘルオーガ！よくお聞きなさいッ！貴方は、この世界の海を統べる者……大海の覇者にふさわしくないわッ！」

翼を開き、水の力を限界まで高める。ミズキの体が青白く輝き、ヘルオーガは鎌のヒレで光を遮る。

「デッドバスターだからこそ成せる技……見せてあげるわッ!!奥義、
“アクアブレード”ッ!!」

千を超える水の刃が放たれ、ヘルオーガの鎌を一つ粉碎。そのまま全身を飲み込み、身動きが取れなくなる。浅い傷だが、ヘルオーガは切り刻まれ続け苦しみがいた。

この“アクアブレード”は、“水の波動”と“かまいたち”を合わせた合体技……。こんな無茶苦茶が可能なのは、デッドバスターだけだ。

「はぁぁぁぁッ!!」

団扇のように翼を扇ぎ、フルパワーの一撃。巨大な水の刃を放ったことで、ヘルオーガの体に大きなダメージが。

気絶したヘルオーガを確認して、眠る二人を翼で押し上げながら泳いだ。

地上

崩れた足場の、僅かな空間。二人を寝かせて、ミズキは再び水の中へ。ヘルオーガから宝玉を取り返しに戻ったのだ。

「……あれ？いないわ!!」

消えたヘルオーガ。ミズキは辺りを見渡す。ウロコ力は、まだ持続されている。

「?!」

殺気を感じ、後ろを振り向いてみる。何も無い毒水から、忍び寄る黒い影……。ヘルオーガだ。ミズキは直ぐに構える。

彼女に向かって来たのは、ヘルオーガが放った氷の矢。水の中を泳ぎ周り、矢を避けて回るミズキ。“水の波動”で反撃するも、当たったかどうか分からない。当たったとしても無傷だろう。ミズキは、ゆっくりとヘルオーガへ近づいて行った。

シェリア地方上空

スワンの泉を探して、トルネロスが飛び回っている。静寂の一時……。悪魔の危険だなんてみじんも感じ無い上空から、赤い雷鳴が見えた。

トルネロス、あそこだッ!!

「承知！」

スワンの泉

さっきの雷で感電し、ミズキは水面に浮いている。瀕死寸前の状態で、戦う気力はもう無い。岸へ上がりたくても、体が動いてくれなかった。

「私……。死ぬの……。かな？カイオーガ様を守れないまま……。仲間すら守れないで……。死ぬのね。」

目を瞑り、闇に身を委ねる。彼女の目には、涙。家族と過ごしたコアルヒー時代が、走馬灯のように蘇ってくる。写真で見たカイオーガの姿は、どのポケモンよりも美しかった。

再び水柱が立つ。ヘルオーガが上空に現れ、ミズキを喰らおうと突っ込んでくる。

「ギイイイイイ！！」

「させるかぁーッ！！」

叫び声と共に、つむじ風がヘルオーガに向かって行った。つむじ風はヘルオーガを切り裂き、ミズキへの起動をずらす。水面から顔を出し、ヘルオーガは放った主を睨む。丸い空を浮遊す

るは、風神と呼ばれし神の代行……トルネロス！

「ギリギリ間に合ったようだな……。ゆくぞ悪魔！代行の裁きを受けるがよい！」

地と平行になるよう両腕を伸ばし、手の平を天に向ける。風の渦を手の上に作り出し、ボールのように投げつける。

風の渦は暴風となり、ヘルオーガを猛攻。

暴風で身動きが取れない中、必死に態勢を立て直し、倍量の矢を放ってトルネロスを攻撃。

フルスピードで矢の間を縫って飛び回るトルネロス。スピードなら上手だと悟り、咆哮するヘルオーガを横目で見やる。

「手荒だが、これしか無いな。」

血迷ったのか、トルネロスはヘルオーガへ突っ込む。目指すは口の中。何を考えているのだろうか。このままでは食べられてしまう。

トルネロスが体内へ侵入したなどと気づかず、ヘルオーガはトル

ネロスを探している。

「ゲガツ!!」

激痛で動けなくなり、ヘルオーガは叫び声を上げた。

体内では、トルネロスが大暴れしている。全ての力を使い、風の渦を体内で膨張させていく。渦は鋭い刃。トルネロスが操る風はまるで、龍の如く荒々しい。風の龍は内蔵を切り裂き、内側から頑丈な皮膚を破った。

トルネロスの風で、ヘルオーガは破裂。肉片は、生々しく水面に浮いている。それを見つめるは、体内から解放されたトルネロス。黒く染まった宝玉を握っている。

「ゼエ……。ハア……。これなら再生できまい。さて、デッドバスター……達を……。」

意識が遠退き、トルネロスは毒水の中へ落ちる。あれだけの力を使ったのだから、無理もない。

改めて周りを見ると、上級悪魔の強さ、知能がよくわかる。落石で退路を断ち、確実に獲物を捕らえようとする。技の威力はまさに脅威。

こんなのが、世界にうじゃうじゃ蔓延^{はびこ}っているのだと思うと、おぞましいものだ。

「……………ああ!!」

回収係のユンゲラーとケーシィ五人が到着。みんな、白い白衣を着ていた。赤いハチマキを付けたユンゲラーが指揮を取り、デッドバスター達を回収。

「先に、アンダーワールドの医療施設へ向かえ!」

「はい!!」

ケーシィ達が去り、他に誰かいないかと辺りを見渡してみる。

「ん? あのお方は!!」

トルネロスを発見し、ユンゲラーは水面へ。脇に腕を通して、力一杯引き上げる。一度岸へ上げ、安否を確かめた。

「トルネロス様、トルネロス様!!」

「う……うう……。」

「よかった。意識がある。……ん？この黒い玉は、宝玉？一応持つて帰ろう。」

アンダー研究所。

運よく逃れて来た神々の代行が集う唯一の場所。聖なる地の代役場、アンダー研究所。只今、教会設立のため工事中。

「……………」

「レジロック、お疲れ様です。」

「?…………ミラ姫。」

工事現場の鉄骨に腰掛けているのは、レジロック。ぼーっとして
いた彼の元へ、ボンドリンク片手にミラがやって来た。

「はい。ももボングリのドリンクです。疲れた時は甘いものが一番
よ。」

「アリカトウゴザイマス。…………マタ、神帝様^{カミツミ}ノコトヲ考エテイタ。
アノ御方ノ力デハ…………無理ダッタ。悪魔ハ強ク、危険ダ。」

「そうですね。けれど、今は前に進みましょう。ゼクロム様がいつ
も言っていたでしょう?『前を見よ、例え遠き道のものであると進
むのだ。必ず、理想の光は其処にある。』って。信じましょう!彼
等の無事を!ほら、せっかく作ったのですから一口くらい飲んで下
さいよ。」

「ア、アア。」

レジロックから離れ、ミラはとあるポケモンの元へ。研究所の出入口へ向かい、外の踊り場へ。広間のような広さのここには、巨大なクリスタルが存在する。ひし形のそれは、宙に浮いて回っていた。クリスタルを見つめている、水の如く清らかなポケモン。スイクン。銀の兜と膝当てを付けていた。

「スイクン。」

「?!……ミラ様。すみません。仕事をせずに……。」

「いいえ。いいのです。同士の心配ですか?」

ミラに聞かれ、スイクンは深い悲しみに暮れた。クリスタルへ目を向け、頷く。

「エンテイ、ライコウ、そして……彼等三剣士が心配で……。彼等だけじゃない。外界に残された代行様達だって。僕等は、貴方達を守る騎士団。今何処にいるのか……無事なのか……。」

「スイクン。」

彼の前に来て、ミラは明るく振る舞う。

「貴方は最後まで、私を守ってくれましたね。彼等はきつと、外界に残された民を守っていますよ。柔なポケモンではありませんからね。ゼクロム様の教えを信じて、待ちましよう。ね？」

暖かな天使の微笑みは、スイクンの心に温もりを与えた。目に涙を浮かべて、はい。と、一言。精一杯の笑顔を見せた。

「ミラ姫ー！」

「レジアイス……？何事ですか？！」

「上級悪魔ノ研究結果ガデマシタツ！！デッドバスター基地へ情報ヲ上ゲニ行クノデ、外出許可ヲ下サイ！！」

「わかりました。お行きなさい、レジアイス！」

デッドバスター基地
医療施設

黒王は、保護されたトルネロスと会話をしている。外界での出来事を全て、包み隠さず教えてくれた。

「そうですか。では今日、日が暮れる前に集落へ行きます。……風神様、もう一つよろしいでしょうか。」

「うむ。」

「私達デッドバスターは、以前にも上級悪魔と接触した経験がございます。外界にいた貴方様なら、マザーコアから警告か何か聞いたのではありませんか？」

「上級……。はっ！そうじゃったッ！！ワシは……。」

トルネロスの回想

ある嵐の夜。ワシはいつものように、外界に残されてしまった民を守っていた……。そんな中、ワシはマザーコアからのテレパシーを聞いたのじゃ。初めて聞くテレパシーだった。清らかな、透き通った女性の声……。

「ポケモンの神の子……。我は悪魔の神、マザーコア。」

「マザーじゃと?!」

「お前達の足掻きは終りだ。我々は明日から、この星を完全制圧するため行動を開始する。まずは……神の木を枯らすとしようか。」

「聖なる木を……?!それだけはさせんツ!!このトルネロス、命に変えてでも、アルセウス様の木を守ってみせるツ!!」

「フフフ……。そう言うと思っていた。だが所詮、レベルの上限が一〇〇までのお前達は負けるに等しい。……いいことを教えてやろう。まずはスワンの泉を狙う。止めれるものなら止めてみるが

いい。フハハハハッ！！」

現在

「という訳じゃ。ワシは、民を集落へ届けたあと……。ディアルガ様の声を聞き、急いで泉へ向かった。ヘルオーガを倒し、デッドバスターを助けようとしたが……。力尽きてしまったな。気がついたらここにいたのじゃ。」

「やはり……。マザーは本格的に動いているのであるな。」

「オズ?!」

どこからともなく、陛下モードのオズが現れた。黒王はオズに向かってズンズン進み、溝内に力一杯パンチした。悪魔の腕を使ったから、オズが負ったダメージは生半可なものでは無い。

「さばりか貴様！さっさと訓練所へ行けッ！！」

ドカツ!!

「ゲフッ！……ぼ……暴力反対……である。イタタタ……。ガイア殿、アンダー研究所から研究結果がきたのだ。」

「何？」

「お主このあと任務だろう？聞いておいてくれぬか？風神様も……。」

「うむ。」

「では、単刀直入に言う。上級悪魔はな……。」

「……何だつて?!」

「では、余は重傷のデッドバスター達を見てから帰るのだ。」

陽気に立ち去るオズ。ガイアは頭を抱えて、なんておぞましいんだと固く目を瞑る。

「さて、ワシもおちおち眠ってはいられんな。少し無理をしてでも、民と神帝様の為に作業をしよう！黒王とやら、研究所まで案内してくれんか？」

「はい。風神様。」

s a i d オズ

オズは、上下の腕を組んで考え事をして歩く。浮遊移動だが。訓練所に来たレジアイスは、血相を変えてオズを呼び出した。危うく陛下と言われそうになったが、なんとかバレずにすんだ。

上級悪魔はポケモンを喰う。だから、ポケモンが持つタイプエネルギーギアが体内に蓄積している。この仮説は本当だった……。

悪魔の限界レベルは二〇〇。フルレベルが上級悪魔と化す……と。レベル一〇〇までの我々には、無理に等しい相手であるな。更には力を押さえ込み、レベルを下げる事が可能だとは……。驚いたのだ。

だがこれでハッキリした！！蓄積したタイプエネルギーを打ち消す、弱点を突きさえすれば、例えレベル二〇〇でも勝てるッ！！

けどそれには、セルフイオにエネルギーを識別する装置を作ってもらう必要があるな。

嚴重ロックされている扉へ向かい、オズは下腕を一つ引つ込める。ぬつと再び伸ばした手には、IDカード。

タッチパネルにカードをかざし、扉を開ける。横にスライドした扉は、オズが入室して直ぐに閉じた。

中では、点滴を付けて眠る三人が……。更には包帯だらけで、壮絶なバトルを物語っていた。

「ん？四人組みの片割れ三人！！と……。」

「エンペルトのイブキ。氷の国の王だ。君が……“オズ君”だね？」

「あ、はい。」

なんと、エンペルトのイブキがいた。三人をシスカに合わせるた

め、IDカードをわざわざ発行してきたらしい。ちゃんと民扱いをしてくれて、内心のオズは一安心。遠くで、眠る三人を見据えた。

よく、頑張ってくれたである。誉めてつかわすぞ……。お前達。

T
o
b
e
N
e
x
t

三章：緊急ミッション！宝玉を奪還せよ！！（後書き）

【次回予告】

ディアルガ

「トルネロス来襲で、デッドバスター達は助かった。

上級悪魔の力は、我々と同等か……それ以上。

レベル二〇〇は、我等神の本気に等しい力だ。気を抜くでないぞ？

次回も祈ろう。

愛しい子等に、希望の光を。」

四章：一時の安寧

穏やかな朝。アンダーワールドは、一時の安寧に包まれている。デッドバスター達も、任務から帰った仲間と再開。青春を送る者や、休憩室で爆竹を楽しむ大人までいる。今日は、滅多にない休暇なのだ。

三人のズルズキンは、シスカの元へ走る。医療施設の中をかけずり回り、カードロックの扉隔離室へ。三人共、オボンの実を一つづつ握っていた。

「おい、そんなに急ぐな！一応ここは病院なんだぞ?!」

「いいだろ?! どうせデッドバスターしか使わない専用施設なんだし! とつとと開けやがれ!!」

「全く、感情にモノ言わせるとは……。」

三人に付き添っているのは、エンペルトのイブキ。カードをかざして扉を開け、三人を中へ入れた。

「よお片割れ！」

「よーカルマ！……シスカは？」

「ミズキとお出かけたよ。食堂か、展望台にいるんじゃないか？」

「ルーク、ルーク！」

「わかった。じゃあカルマ、行ってみるよ！」

ルークがオボンの実を投げ渡し、三人はそそくさといなくなった。
入れ替わりで、イブキがカルマの元へ。

「メチャクチャな友人だな。」

「いいんツスよ。あれで。でなきゃ、俺が面白くないからさ。」

寝台の上、カルマは早速オボンの実にかじりつく。微笑みながら
のため息は、四人組を心配しているかのよう。

所変わって、展望台。松葉杖で体を支えているシス力と、点滴台を抱えるミズキがいた。アンダーワールドの第五ブースを見つめて、生きているのだと染々思っていた。

ヘルオーガを倒す事はできなかったが、生きている。型破りで桁外れなパワーは、デッドバスター三人ではかなわない。話でしか聞いていないが、トルネロスが来なければ確実に死んでいた。

しかし、彼さえも限界寸前までパワーを出し切らなければならなかった……。これが、今のポケモン達の現実だ。

死に絶えた世界は、今も悪魔に支配されたまま。闇に飲まれる定めから、なんとしても抗わなければならない。ここは、神が愛する樂園なのだから。

「シス力。」

「うん？」

「個体値……測った？」

「うん。けっこう低かったよ？」

「いくつ？」

「一V。攻撃特化。」

聞いて呆れた。ミズキはため息混じりで首を振る。

デッドバスター合格基準として、個体値も含まれている。最低で二Vはないといけないのに、一V……。だから弱いんだと、ミズキは冷めた目で見やる。

「よく黒王様はお許しになったわねえ……。」

「はは。」

「笑い事じゃありませんわ!!！」

「いたー！」

突然の声にビックリし、体を強張らせる二人。入口へ視線を移すと、ズルズキン三人の姿が。

「元氣そうだな！シスカ！」

「心配かけたね。もう大丈夫だよ。ずっと立ってたから手がキツイや……。部屋に戻ろう。ミズキも。」

「ええ。」

＊＊

部屋に戻り、明るい会話を楽しむ四人組。ミズキとカルマ、イブキ王もいるから、七人だ。

戦いのことなんて綺麗さっぱり忘れて、世間話や黒王への愚痴を言いたい放題。楽しそうだからいいかと、イブキは黒王への愚痴を聞き流す。

「なあ、火の国が二つあるの知ってるか？アルランダとアスナロ。」

「ああ。あれってなんなんだ？イブキ王、教えて下さいよ。」

「あれは方言だ。正式名はアルランダ。アスナロは、エスパーの国の方言。それが地味に浸透しつつあるのが現実だが……。たまに私も、つい言ってしまうのだ。」

「へえ。」

「関係ありませんが、私の名前は水の賢者様の名前。適合者とわかってから、賢者様直々にくれたの。」

初耳だとカルマが驚く。体を大きく動かしてリアクションしたら、傷口の縫い目が引つ張られて痛みが走る。痛そうに傷口を抱えてバタンキュー。馬鹿だと四人組に笑われるが、笑ってやり過ごした。

「なんだよ！生きて帰って来たんだから騒いでいいだろう？！馬鹿でいいよ今日は！。明日から復帰なんだぞ俺等！ねえ？！」

「そうね……。そろそろ努力値を上げたいし。」

「「努力値？」」

「ガル？」

無知な四人組が首を傾げた。同時に、ミズキが頭を抱える。

「ぶっはははは！ミズキが悩んでらあ」

「だって、こんなデッドバスターあり？！よく今まで……。はあ、いいわ。教えてあげる。」

「私達はね、レベルアップでステータスが一定量増すの。その時にもらえるのが努力値。レベル上げ……。とも言われているわね。私達デッドバスターは使えないけど、栄養ドリンクで更にステータスは上げられるわ。」

「なんでデッドバスターは使えないんだよ？」

「悪魔化してるから無効なのッ！！可能なのはポケモン達と不適合者だけよ！！も……。頭が痛いわ。」

律義なミズキ姫。無知な四人組は、申し訳なさそうに頭を下げている。

豪華に高笑いするカルマは、傷口に響くとわかってて転げ回る。

「傑作だぜ四人組！」

「すみません。」

「クウ……。」

楽しく騒いでいる声を、廊下ごしに聞くポケモンがいる。オズ、セルフィオの二人だ。聞こえないよう、少し小さめに会話。

「よかったであるな。」

「ああ。彼等は重要な戦力だ。大事にしなければならぬ……。マザーが本格的に活動を始めたのだから、我々三王家も地道に活動していこう。デッドバスター達の負担を少しでも軽くしなくては！」

「うむ。……ガイア殿はまだであるかな？」

「アンダー研究所は遠い。夕方には帰って来るだろうよ。さ、オズ陛下は私の研究室に来てもらおうか？手伝ってくれ。」

頭を持たれ、オズ陛下は強制連行。腕を全部しまい、浮かない表情で言った。

「行っても構わないが、人体実験ならお断りするのだ。余は悪魔でもポケモンなのだ。」

……と。そんなエグい真似はせん！！叱られたオズは顔もしまうつ飾りが動いて顔面が消えた。

「装置が完成したんだ。お前はモニターになってくれればよい。」

「なに？仕事が早いであるな……。」

顔を隠したまま、上の腕だけ出して組む。拉致された状態で、これからの戦いについて考え始めた。

聖なる木……。確か我が国の旧城下にもあった気がする。どこだったかなあ？

南地区 第二ブース

セルフィオ帝王が統治する、エスパーの国。城の他に、風車のような黒い塔があった。あの塔が、セルフィオの研究所。二人はテレポートして、もう中にいた。片付いた部屋だが、床にスパナやネジが散乱していた。何かの資料まである。

「今までは超能力を使って片付けをしていたが……。もうあれほどの能力は無いからな。面倒でそのままにしている。どうせ、空中浮遊の王二人だしな。床なんていいだろう。」

「なんとまあ大雑把である。」

目を細め、オズは辺りを見渡した。

分厚い本の影から、何かが飛び出す。その何かは具現化し、オズの背中をぽんと叩く。ビックリしたオズは、顔も腕もしまって固まる。

「「あははははー!」」

「ひ……酷いである!不意打ちは卑怯である!」

影はガイア黒王だった。二大勢力の王は、腹を抱えて大爆笑。

二人を見渡し、ふてくされたオズは再び全部しまつ。そのままバタンと床に寝転んでしまった。

「グルだったである……。二人はいつだってエイプリルフルなのだ。」

「ネタだからいいだろう?少しは楽しくやろうぞ!な?」

「ああ!」

「余は玩具おもちゃじゃないのだあー!!」

大人のドンチャン騒ぎはしばらく続き、いつの間にか戦線のことを忘れていた。

所変わって隔離室。シスカとミズキは、ルークとイヴィルからもらったオボンの実を食べている。

「自分達八、四人一緒にいナイと駄目だからね。こうなるト思ってた。」

「俺様もだ。」

「エール、ずっとシスカ探してた。」

「そうそう！エールの奴、ずっとお前のこと探してたんだよ！」

ルークが語るは、シスカ出勤時から二時間後のこと。盾を持ったまま、そわそわしているエール。シスカの名を連呼して、うるちよろうるちよろ……。

「シスカ？シスカー。」

「任務中だよ。」

「シスカいない？イビ、シスカは？」

「……。」

イビル、流石に苦笑いするしかなかった。
更に一時間後。ルークが木の実を取りに行っている最中……。休憩
室にて。

「ルーク、ルーク、あれ？イビ、シスカは？」

「任務中だってば。」

更に更に三〇分後。三人で散歩中。

「シスカは？」

「「エール……。」「

「ほえ？」

今現在

という訳だ。おそらく、シスカのピンチに呼応していたのかもしれない。

今はルークの尻尾を抱いて……。しかも先っちょをハムハムしていた。他人の尻尾をおしゃぶりにするの、ありか？

「相変わらずの甘えたちゃんだなあ、エール。」

「もきゅもきゅ。」

「噛みながら話すのやめてってば。ルークもよく嫌がらないよね。」

平常心のルークを関心。シスカは双子をしばらく見つめていた。

「エールが安心するなら、別にいいんだ。」

「まあ、日常茶飯事だしね。」

「テメエら変わり過ぎだろ……。」

横入りのカルマ。好奇心眼差しで双子を見やるも、二人は何も気にしない。

甘えたちゃんのエールは、いつだってやりたい放題。けど、ただ単に寂しいからという些細な理由が元。ルークがいないと、不安に押し潰されそうになるし……。かと言って、ルーク以外の仲間がなくてもソワソワ。

結論、エールは四人一緒にいないと寂しいのだ。

「困った四人組ですこと。そんなんでは、まともに任務をこなせないでしょうに。」

エールを指摘するかのようない草。ミズキの言動は、ルークの怒りを買った。

感情に任せて殴りかかろうとするルークだが、イヴイルによって阻止されてしまう。

「落ち着け！落ち着けっテバー!!」

「ガルルルルッ!!」

「あ……悪魔の言葉？ルークも使えるのか?!」

「あ？！なんか言ったかカルマ……。」

「いや、あの……。」

ルークの言動を聞いたのは、カルマとミズキだけが初めて。イクキ王は部屋の隅を見つめ、まずいことになったと眉間にシワを寄せた。

ファン

ファン

ファン

緊急事態のベルが鳴った。ガイア黒王から直々の命令が、基地全体に響く。

どうやら、聖なる木の役割がわかったらしい。大至急、スワンの泉へ向かい木を悪魔から守る作戦だ。

呼び出されたのは、次の三チーム。

ソウルド ダブルベア 悪闘四天王

まだシスカが完治していないのに、四人組が呼ばれた。無理してでも四人組で来い！と、ガイア黒王はかなり投げやりな声を出す。

放送室

「なお、この私ガイアとセルフィオ帝王の代わりに……。水の賢者様と鋼の賢者様が同行することになった！彼等の指示に従って行動するように！！オズとルークッ！！」

隔離室

「はいッ！！」

『渡したい物があるから城に來いッ！！いいな？！』

……以上。生きて帰って来るのだぞ？！デッドバスター達よ！！』

怒鳴りのおかげで熱が冷め、ルークはスピーカーにびびって固まっている。エールも一緒に固まっていて、クスクスと小さな笑みが広がった。

さて。中途半端になるので、今回はこの辺で終わりにしましょう。次回、ついにブルズキン四人組が大暴れします。主人公の実力はいかに……。

To
be
Next

四章：一時の安寧（後書き）

【次回予告】

レシラム

「あらあら……」。

今回はグダグダで、駄目々な章でしたね。
でも、みんな無事でよかった。

どうか、お母様の木を守って下さい！！

次回も祈りましょう。

愛しい子等に、希望の光を。」

五章：四人組と三大家 朝編

ついに、主人公が本領発揮します。

ルーク達はデッドバスター基地を離れ、ガイア黒王の城を目指して歩き出す。タブンネの治療のおかげで松葉杖が取れ、ズボンも縫ったシスカは相変わらず大人しい。主に、ルークとイヴィルの弾丸トーク。エールはルークの尻尾を抱いて歩くだけで、何も喋らない。

「いよいよ大暴れだッ！！野郎共、武器をだせー！！」

「「おー！！」」

尻尾から離れ、エールが先に武器を出す。白い盾で、中央には黄色い十字架模様。

ルークはマシンガン二つ。まさか、これを連射する気か？シスカはお馴染みのレイピア。

イヴィルは……武器所有を拒否したため持っていない。代わりに、両手に赤く輝く光の炎を纏っている。

「デメエらが悪闘四天王か？」

楽しく歩いていると、道端で同士に出会う。
チームダブルベアの、リングマとツンベア。
チームソウルの、シャンデラとミカルゲ。そしてオズ陛下。今は民だ。

「やあ、ズキン四人組。ちょうど皆で……じゃない、全員で黒王様の城へ行こうと考えていたんだ。どうだい？」

「皆？^{みな}なんで王様口調に？」

ついうっかり発した言葉で、周りから視線が集まる。心中の陛下は……。

わああああッ！！やっちゃったであるッ！！
ど、どうしよう……。何てごまかそうかな。

とご覧の有り様。

「ほ、ほら！俺って黒王様と親しいから……移っちゃったんだよ！あははは。平民なのに何言ってるんだ俺は。ごめんよ、ルーク。」

「いいんだよ。間違いは誰にでもある。行こうぜ！みんなで！」

上手くいったのか、みんな城へ向かい始めた。オズは一人、額の汗を拭いながら一番後ろに行く。

「先輩よお、指揮官の黒王様が来ないってどういうことなんだ？」

「ああ、極秘任務って奴さ。王族程の個体値がないと達成不可能な任務、それをするために来ないんだ。力を温存しないと、悪魔には勝てないからね。」

「へー。デラ、いいこと聞いたね！」

「うん。オズ先輩って、物知りなんだね！」

「あ、あはは。まあね。」

余はフル可動だから、正直キツイのだ。アレやってコレやっては難しいである。

ガイア黒王の城

純白の城壁、屋根は鮮やかなレモン色。これが黒王の城だ。
木門もくもんの上に腰掛け、デッドバスター達を待つ黒王。

西地区は至って平和。こんな時に窃盗事件が起こるらしいが、見えるのは光のみ。目を瞑り、ガイアはある人の言葉を思い返す。

貴方はポケモンよ。周りの意見なんて関係無いわ！誰がなんと
言おうと、ずっと貴方の側にいるから。

「……そうだ。君はいつも、私のために頑張ってくれた。だから、
今度は……。」

「黒王おー!!」

悪魔染みたがなり声。ルークだなど、下を見る。

「なんだ。全員で来たのか。」

「何くれんだ？」

「任務の詳しい内容も、できれば……。」

「内容は外界に出てから聞ける。渡したい物とは、これだ。」

門の上から、小袋が二つ落ちてくる。ルークとオズは右往左往動き回り、しまいに正面衝突。

なんとかキャッチして、中を開けてみた。

「笛？」

「こっちは海の宝玉だよ。ルーク、なんで笛？」

「さあ。中に紙があるぜ。」

「それを持って外界へ行け！賢者様が説明して下さい。緊急ミッシェンだ、急げ！！」

「は、はい！！」

慌ただしく動くデッドバスター達を見送り、ガイアは再び自分の世界へ。

「ルナ……。」

シエリア地方

エリア二

現在位置。スワンの森の入り口。水の賢者スイクンと、鋼の賢者

レジスチルが待っていた。護衛のシンボラーが二人、背後を監視中。

「来たな。早速だが、任務の内容を説明する。」

今回の任務は、聖なる木を悪魔から守ることだ。ヘルオーガはもういないから、このダンジョンに悪魔はいない。しかし、まだ泉の奥地が残っている。

研究結果、奥地には中級悪魔が多く潜んでいるとわかった。大丈夫、上級悪魔はヘルオーガだけだ。」

「モシ、聖ナル木が枯レテイタラ……。海ノ宝玉デ清メナケレバナライ。持ッテ来タカ？」

オズは片腕をしまい、また出す。海の宝玉を見たレジスチルは、静かに頷いた。

「【聖ナル木】……。ソレハ、神ノ命。枯レテシマエバ、神ハ滅ブ。」

「「ええ?!」」

「ソレヲ阻止スルノガ、緊急任務ノ目的。モウ一日タツタ。木ガ心配ナンド。頼ム！カラ貸シテクレ！」

感情を爆発させたレジスチルは、七つの点目を青く染めた。嘆いているのだと感じ、デッドバスター達は元氣付けるためにと決意表明。『嫌だと言う奴はいないさ！』と、ルークが締めくくった。

「エール頑張るよ！大丈夫だよ！」

「アリガトウ……。デッドバスター達。」

涙を拭う仕草をし、レジスチルは目の色を戻す。

微笑みを浮かべていた一同、シンボラーがビームを放ったのを目撃。ガーマンがこちらへ迫って来ているのを、肉眼でも確認した。

「マザーが動き出したのか？！急いで泉へ行こう！！」

走る賢者を追いかけて、デッドバスター達は武器や技を駆使して進む。

ルークに至っては引金を引きっぱなしだ。枯れ木や岩まで破壊しながら走り抜けていて、オズに危ないと怒られる始末。

「サーセエ。」

「全く……。お、そろそろ泉だぞ!!」

「悪魔がガーマンだけで助かったな!レジスチル!」

「ダナ!」

全員泉の中へ入り、ツンベアーが人数確認。
確認が終わると、入り口へ向かった。白い息を吐いて、入り口付近の空気を冷凍。氷の壁で退路を断った。これで、ガーマンは泉へは入れない。

「よし!ここからは笛が必要だ。ルーク。」

「これか?」

懐から笛を取り出してみせ、袋に入っていた紙も取り出す。無言で手を差し出すレジスチル、渡してくれということだろう。ルークは、レジスチルに笛と紙を渡して団体の中へ。

「オズ、宝玉を出してくれ。」

「はい。」

宝玉、笛、泉のフロア。条件が揃ったところで、レジスチルが笛を吹き始めた。

優しい笛の音は、心を清める聖なる声音。まさかと、オズは笛を見つめている。白い木で作られているその笛には、不思議な飾りが付いていた。

「うわ！」

オズの手の内で、宝玉が鮮やかに輝く。独りでに動きだし、オズの手から離れた。宝玉は、光の螺旋を造り出し“ある映像”を生み出す。

それは……。

「カイオーガ?!」

そう、大海の覇者カイオーガ。青く美しい体は、デッドバスター達を魅了した。

「藍色の玉を手にした者よ、私の名はカイオーガ。このメッセージを聞いているということは、私は今、悪魔に囚われていることでしょう。今から、とても重要なことを話します。よく聞いて下さい。

世界を救うには、三つの条件を揃えなくてはなりません。マザーに気づかれないよう、お兄様達と団結し一つづつ教えることにしました。

まず、【一番強い悪魔】から聖なる木を守って下さい。枯れてしまっても大丈夫。【純白の笛】と【藍色の玉】があれば、木は元に戻ります。

次は、【紅色の玉】を探しなさい。次の条件は、そこにあります。

愛しい子等に、水の祝福があらんことを……。」

映像は消え、玉はオズの元へ帰って来た。

「ということだ。けれど、枯れた木を元に戻すには……。今いる代
行様や賢者では不可能なんだ。聖なる木に【祈りの音色】を聞かせ
なきゃならない。賢者の歌と笛で成り立つ音色だ。では何故来たの
か。それは……。」

スイクンは、レジスチルを横目で見やる。笛と紙をしまつて、レ
ジスチルは言う。ギガス王がここにいる可能性がある。

「ギガス王？ 代行と賢者を束ねる存在の、レジギガスのことか？！」

「そいつがここにいる力もつてか……！」

「ソウダ。ギガス王ナラ、【楽譜】ヲ熟知シテイル！ 私が彼カラ教
ワルカラ、心配ナイ！」

やけに喋るレジスチル。彼が話す言葉は、普段よりスムーズなもの
だった。きつと、ギガス王がいるとわかって不安が軽減されたの
だろう。

「そうとなれば、作戦会議だな。」

リングマが提案。全員同意で、聖なる木を復活させるプロジェクトがスタートした。

これは、三大王家ではできない仕事だ。三大王家は、その強さ故マザーにマークされている。よって、プロジェクトが気づかれ安い。普通のデッドバスターならば、マークされていないため危険性が低い。

上級悪魔に勝つ可能性は極めて低い。けども、ポケモン達に選べる選択肢は、これしかないのだ。

オズが民と陛下に分けている理由の一つは、マザーの目眩まし。本当は“最終兵器的扱い”だったのだけれど、それが良い方向へ進んでくれた。今のオズなら、三大王家でも参加可能だ。

「よし、作戦はこうだ……。」

謎の場所

ここは、闇の空間……。光るは水晶のみ。中には、外界が映っている。スワンの泉にいる、デッドバスター達が映し出されていた。水晶に触れた手が一つ。赤い爪に白い肌……。女性の手のようだ。

「奴等、何を企んでいるのだ？無駄な足掻きは効かぬというのに……。そうだろう？」

声は、正面にいる誰かに話を振った。闇の中にいる誰かは、機械的な口調で返事をする。

「そうだ。少し遊戯をしてみらおうか。」

「彼を外界へ？」

「そうだ。奴等がどんな反応をするのか、楽しみだ。頼んだぞ？」

「承知しました。」

誰かは、闇の中に消えた。

歩き始めている、水晶の中のデッドバスター達。映っているのは、悪闘四天王だけだった。

泉の奥地は、複雑な迷路。段差を越えて、木の根でできた洞窟を抜け……。地割を飛び越えて最新部を目指す。

「グガアアツ!!」

「ンナ! 悪魔?!」

先頭に行くレジスチルが、人面ライオンに襲われる。普通の“守る”でガードするも、全く役に立たない。レジスチルは、穴だらけになるシールドを凝視した。

シンボラーの攻撃さえもびくともしない。当たっているのに、ダメージが無いかのよう。

「レジスチル!!」

ルークがさかさず前へ。悪魔が死ぬまでマシンガンを乱射した。倒れ、グシャグシャになった胴体からは、内蔵が露出している。

「大丈夫か?!」

「アリカトウ。助カッタ。」

「もしや、入り口にいた大群の残骸だけなのか?だが、気を引き締めて行こう。」

辺りを警戒しながら、スイクンは言う。眉間にしわ寄せ、物陰を観察。

大丈夫とわかると、再び歩き出した。

彼等を見つめる影がある。崖の上に立は、青いポケモン。上手く気配を消していて、デッドバスター達でも気づいていない。

「ターゲット確認。排除……開始。」

待て。まだ早い。木がある場所へ向かえ。

「承知。」

青いポケモンは、女性の声に従った。ロボットのようにな、自分の意志を持たないのだろうか。

いきなり強い悪魔が現れたり、脆くなった地盤に足を取られたりと、プロジェクトチームは困難な道を突き進む。

風すら吹かない外界には、恐怖と不安が織りなす静寂だけが広がっている。僅かな光を頼りに、ポケモン達は歩き続ける。確かなメッセージを信じて。

聖なる庭園

本来ならば、グラシデアの花が咲き乱れている丘。毒水のせいで生態系が崩れ、全く違う花に変わっていた。

「ここが奥地?!」

「ルーク、怖い。」

闇の楽園と化した聖なる丘は、瘴気を生む花に占領されている。ひとまず、聖なる木がある丘の中心を目指すことに。

「…………?!」

スイクンの動きが止まった。目の前には、彼にとってかけがえのない存在がいる。だが、様子がおかしい。震える体から発した言葉は、デッドバスター達をどん底へ突き落とす。

「コバルオン…………?!」

そう。立ちはだかるは、スイクンと同じ銀の装備を纏ったポケモ

ン、コバルオン。目が虚ろで、完全に光が失われていた。
明らかに様子がおかしいだけじゃなく、首に昆虫が巻き付いている。
二メートルの赤茶色芋虫を観察するは、レジスチル。冷静にこの事
態を理解したあと、デッドバスター達に告げる。

「悪魔ダ。」

「はあ?!」

「アノ虫ハ見覺エガアル……。アレハ、寄生虫。」

寄生虫。そう言われてコバルオンが口を開く。

「我々を知っているのか？ポケモンのゴーレムにしては物知りだな。
私は、『パラサイト』という昆虫形悪魔。私は変わっていてね……。
レベルが五〇までしか上がらないんだ。だから、敵の体に乗っ取っ
て活動している。このポケモンは、鋼の賢者様らしいな。」

コバルオンを凝視していたデッドバスター達は、レジスチルへ視
線を移した。オズは一人、冷静になろうと頬を叩きまくっている。

レジスチルはまず、みんなに謝った。自分は賢者様の代理人なんだと。

ギガス王の命令で、賢者代理人として活動するように言われていたらしく、賢者ではないのだ。

「騎士、トモ言ワレテイル。スイクンモ。私ハタダ、ギガス王ニ使エテイルダケノ下僕。」

「コイツの記憶を見る限り、そうだな。こんな仕組みで世界を守っていたとは知らなかった。……さて、お前達魔獣は、コバルオンを助けようと考えている頃だな。」

身構えるコバルオン。いや、パラサイトはポケモン達に言う。やれるものならやってみろと。

「その前に、ギガス王とやらの居場所を教えてやろつ。」

「居場所ダト?!」

「聖なる木を守るために、我々パラサイトと戦っている。乗っ取られでもしたら大変じゃないかな？何か……大切なキーワードがあるようだが。」

コバルオンの記憶を掘り起こし、パラサイトはデッドバスター達を煽り立てる。

ギガス王ならどう対処するか、レジスチルは必死に考えた。彼が結論を出す前に、悪闘四天王がみんなの前に立ち塞がる。戦闘態勢を取り、ルークは背後の仲間に向けて叫んだ。

「ここは俺等に任せなッ！！主役が目立ってなきゃ、話にならねえだろ?!」

「主役っておい……。お前等は個体値低いんだろ?!四人でいいのか?!」

「オズ、君は何か勘違いしてない？僕達には……。」

「常識トいう粹八不要。」

「ド派手に暴れてぶち破る！これ、エール達のやり方!」

「そうさ……。俺達、悪闘四天王に常識は通用しないッ！！野郎共、フルパワーで行くぜ？」

ニヤリと笑い、ルークは銃口を斜め上の空へ。続いて三人が臨戦態勢に入る。

バトルが始まった隙に聖なる木へ。そう小声で囁くは、ソウルドのリーダー。賢者達の同意を得て、この場は四人組に託すことに。

ルークの表情が、徐々に歪みだす。感情を高ぶらせた彼は、鬼とも言える形相をしていた。一気に引金を引くと同時に、ハイトーンで甲高く叫ぶ。

「野郎ッ！！狂い暴れろおおーッ！！」

無駄に空へ乱射してから、コバルオンの元へ。

「今だ！！」

オズの合図で走る。デッドバスターと賢者は、聖なる木まで一気に駆け抜ける。が……。

「とつとつと。」

オズが失速。気づかれないように離れていった。周りに誰もいなくなると、彼の元にケーシィとメタモンが登場。回収係の者だ。

「オズ・ターンレイズ陛下、お時間です。極秘任務に移って下さい。」

「あとはボクに任せるモン！ばっちりなりきるモンモン！」

「頼んだである！ケーシィ、早く基地へ運んでくれ！」

極秘任務に向かうため、オズはケーシィと共にテレポート。残されたメタモンは、オズに変身して戦火へ。

s a i d 四人組

過激でハードなバトルが展開されている。

シスカの動きは、忍者のように軽やか。イヴイルはそれ以上の運動神経を見せつける。

ルークとエールは無鉄砲なバトルを。攻撃はルーク、防御はエールが担当の二人羽織り制だ。双子だからこそそのチームワーク、以心伝心がバトルの鍵だ。

逃げ惑うパラサイトは、やけに冷静だ。それもそのはず。この体はコバルオン。鋼の精神は今は、自分の意のままに操れる。

ルークの背後を取り、パラサイトは“メタルバースト”を放つ。彼は攻撃に気づいていない。

「エール、ルーク守る！クロスシールド！！」

盾に半径一メートルの魔法陣を纏わせ、ルークを守った。エールの存在に気づいて、ルークは後ろを向く。

「サンキュー！！いくぜ悪魔あッ！！」

弟を正面に、ルークはやたらめったに銃弾を飛ばした。魔法陣をすり抜け、弾は彼方此方へ飛び交う。

弾と同じ早さで避け、すかさずシスカへ攻撃。“聖なる剣”を繰り出した。

「ぐああッ！！」

「まずは一人……。ん？！」

中距離からのパンチ攻撃。イヴィルの拳がコバルオンの頬にヒット。パラサイトもダメージを受けた。

「なるほど。黒服が遠距離、独眼が近距離、裏切り者が中距離か。」

「悪魔じゃない、自分ハズルズキン……ポケモンだ！」

「果たして、それは本当かな？悪魔に近いポケモンが、この世に存在するとは思えない。悪魔は、マザーコア様しかお造りになれない。」

お前は本当に、ポケモンなのかな？」

表情の無いコバルオンを凝視して、彼は自分の足元を見つめる。五本指の足には、赤い爪。濃紺の皮膚……。みんなとは違う、唯一のパーフェクトデビル（完全な悪魔）。

ポケモンだと信じてきた。あの日から、ずっと。そしてこれからも。

「五月蠅。お前の意見なんか、聞きたくナイッ！！」

打撃攻撃の猛攻。パラサイトはズルズキンの素早さと同じくらい早く、わざとこのスピードで攻撃を避け続けた。

「ポケモンが完全に悪魔化するのはあり得ない。お前は悪魔だ。」

「五月蠅ッ！！」

「その両手の炎、ポケモン魔力では無いだろう？ いい加減認めたらどうだ。」

「黙れ……黙れえーッ!!」

空気を切り裂く咆哮と共に、立てた爪で本体の虫を切り刻んだ。まだ四分の一しかみたないが、本体へのダメージは凄まじいだろう。その痛みが来る前に、ルークが本体へ向けて乱射。装甲の皮膚は固く、中々貫通しなかった。

「うあアーッ!!」

本体と、操られているコバルオンが悲鳴を上げた。跪ずいて、流れる鮮血を視界にいれた。身体中を駆け巡る激痛と、四人組に対し怒り。パラサイトは、ついに狂気に走る。

充血した眼は、背後にいるルークへ向けられた。動揺せず、ルークはニヤリと笑うだけ。

「許さんぞ……。貴様等全員皆殺しだッ!!」

「やれるもんならやってみな。俺達は、他のデッドバスターと違っ

て柔じゃないぜ？」

「ないぜ！」

ルークに続き、エールが復唱。兄の背後でビビっていた。

戦線に足を踏み入れた四人組。パラサイトを倒し、無事にコバルトンを救出できるのだろうか。

そして、賢者の王レジギガスの安否は。

T
o
b
e
N
e
x
t

五章：四人組と三大家 朝編（後書き）

【次回予告】

レシラム

「聖なる木と神帝の命。

爆竹のようなこのプロジェクトは、ポケモン達の知恵の結晶。やる
しかありません。

激闘をせいするは、悪魔か？四人組か……。戦いは、夜編に続きます。

次回も祈りましょう。

愛しい子等に、希望の光を。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5940y/>

ポケモンTHEクロニクル

2012年1月13日18時58分発行